

ス。

「第三條英國臣民ニ關スル本會ノ規定ハ其臣民ノ英國出產ノ者タルト又歸化ノ者タルトヲ問ハズ、總テノ女皇ノ臣民ニ之ヲ適用ス。

「外國ニ關スル本會ノ規定ハ清國皇帝及ビ□□□□ノ臣民ニ適用シ、且女皇ノ敵ニアラザル日清以外ノ國ノ臣民又ハ市民ニモ之ヲ適用ス。

「第四條英國臣民間若クハ外國人ハ英國臣民トノ間ノ爭事ヲ審問判定スル爲メ、英國臣民ノ財産又ハ身體ヲ管理監督スル爲メ、英國臣民ノ犯セル罪過ヲ鎮壓處罰スル爲メ、又ハ英國臣民間ノ秩序ヲ維持スルガ爲メニ支那及ビ日本ニ於テ行使スル女皇ノ管轄權ハ、總テ本令ノ規定ニ從フテ之ヲ行使スベク決シテ他ノ法規ニ從フ可キニアラズ。

「第五條前述ノ民事刑事ノ裁判權ハ事情ノ許ス限リハ、普通法衡平法條例及ビ英國現行法律ノ主義ニ準シテ之ヲ行使シ、且英國治安裁判所ノ有スル權力ト其實行セル手續ニ由リテ適宜之ヲ行使スベキモノトナス。但本令ノ他ノ規定ニ從フベキハ勿論ノコトトス。第七條ニ因リテ上海上等法廷ハ設置セラレタリ。

第五十四條ニハ左ノ如ク規定セリ。

「上等法廷ハ准海事法廷タルベシ。准海事法廷トシテ支那及ビ日本ニ來航スル船舶及ビ人ノ

爲メニ裁判ヲ爲スノ權ヲ持シ其裁判權ノ範圍ハ通常海外領地ニ存スル准海事裁判所ノ權限ト同一タルベシ。

第百十七條ニハ外國人ヨリ英國臣民ニ對シテ前述ノ諸裁判所ニ提起セル訴訟ニ關シテ規定セル所アリシカドモ、此等ノ規定ハ千八百八十一年ノ院令ニヨリテ廢止セラレタリ。

千八百五十九年ノ院令ニハ之ト同一ノ問題ニシテ規定セル所アリシカドモ、其規定ハ千八百六十年ノ院令ニヨリテ廢止セラレタリ。千八百六十年ノ院令ハ千八百六十年以前ノ院令ヲ總テ廢止シタリシモ、該法令亦千八百六十五年ノ院令ニヨリテ廢止セラレタリ。

千八百六十五年ノ院令第百二十七條ニハ在上海上等法廷ノ判官ハ手續規則ヲ制定シ得ル旨ヲ規定セリ。

十九、千八百六十五年ノ樞密院令ノ附與セル權限ニ因リテ上等法廷ノ判官ハ一ノ訴訟手續規則ヲ制定シタリ、而シテ此規則ハ女皇ノ國務大臣ニヨリ適當ニ認可セラレテ千八百六十五年五月四日ニ發布セラレタリ。

其規則中ニ左ノ如キコトアリ。

「第二十六則各人が當法廷ニ出訴シテ強制セント欲スルノ請求ハ百弗以上ノ金錢物品若クハ其他ノ財産ニ關スルカ、百弗以上ノ金額ニ達スル爭ニ直接間接ノ關係ヲ有スルカ、又ハ百弗

軍艦千島損害賠償反訴請求事件上訴狀



以上ノ賠償額ノ要求ニ關スルトキハ先ヅ請願ヲ提出スルコトニヨリテ其手續ヲ開始ス但シ次ノ規定ニ從フベキモノトス。

「第五十五則被告ハ答辯ヲ爲スニ當リテ特別ノ抗辯ヲ呈出シ、而シテ法廷ハ若シ此抗辯ニシテ有効ナル者トセバ被告ハ原告ヨリ其訴訟事件ニ關シテ救済ヲ得ルノ權アリト思惟スルニ於テハ、被告ノ請求ニヨリ場合ノ事情ニ從ヒテ或ハ審問ノ開始前ニ、或ハ審問中ニ、同一ノ訴訟ニ就テ反訴ヲ起シ、反求ニヨリテ原告ヨリ救済ヲ請求スルノ權ヲ被告ニ與フルコトヲ得、本訴ト反求トヲ同時又ハ別時ニ審問スルノ命令ヲ下スコトヲ得、且費用其他ノ事項ニ關シテ正當ト信ズル方法及ビ條件ヲ命ズルコトヲ得、而シテ如何ナル場合タリトモ其適當ト信ズルニ於テハ原告ヲシテ反求ニ關シテ該法廷ノ下スベキ判決ヲ履行スル爲メ、供托其他ノ方法ニヨリテ法廷ノ満足スル丈ノ保證ヲ供セシムルコトヲ得。」

「第三百三十九則此規則ニ明定セザル總テノ事項ニ關シテハ同種ノ事件ニ就キ在英國ノ上等法廷及ビ治安裁判所ノ遵行スル規則ヲ成ルベク遵行スベシ。但シ海事裁判所又ハ其他ノ特別裁判所ノ管下ニ來ルベキ事件ニ關シテハ在英國ノ海事裁判所又ハ其他ノ特別裁判所規定ヲ成ルベク遵行スベシ」

二十、千八百六十七年前述法廷ノ裁判長ハ在日本法廷ニ於ケル手續規則ヲ制定シタリ而シテ其

規則ハ女皇ノ國務大臣ニヨリ適當ニ認可セラレテ千八百六十七年六月發布セラレタリ。

其諸規則中左ノ規定アリ。

「第一則海事法廷ニ於ケル總テノ訴訟手續ハ先ヅ其冒頭ニ海事ノ件ト認メザルベカラズ。

「註釋、海軍法廷ニ於ケル訴訟手續ハ物的タルカ又ハ人的タリ、人的ノ訴訟ハ普通法及ビ衡平法ノ事項ニ關シテ上等法廷ノ遵行スル手續ニ從ヒ他ノ同種ノ訴訟ト同一ノ方法ニ於テ之ヲ爲スベキモノナルガ故ニ、茲ニ之ヲ特示スルヲ要セズ。從テ左ニ掲グル訴訟ノ概略ハ單ニ物的訴訟ニノミ關スルモノト知ルベシ。物的訴訟ト云ヘバ物ニ對スル訴訟ニシテ換言スレバ直チニ訴訟ノ目的物ニ對スルモノナリ。

「第十七則總ベテノ事件ニ關シ法廷ハ宜シク英國ノ海事法廷ニ於テ適用スル如クニ英國法ヲ適用スベシ。此規則及ビ當法廷ノ手續通則ニ反對ノ規定ヲ爲サザル限リハ成ルベク女皇ノ上等海事法廷ニ現行セル規則ニヨリテ總テノ手續ヲ追行スベシ」

二十一、在日本法廷ハ千八百七十八年ノ日清樞密院令第五條ニヨリテ設置セラレ、其裁判權ハ同令第六條ニヨリテ指示セラレタリ。其第四條ニハ尙ホ日清上等法廷ニ關スル規定ヲ爲セリ。同令ニハ又千八百六十五年ノ日清樞密院令及該院令ニヨリテ生ジタル在日清上等法廷及ビ其他ノ在日本法廷ニ現行セル諸規則ヲ（此規則ハ既ニ述ベタリ）在日本法廷ニ適用スベキ



コト恰カモ其在日本法廷ハ該院令ニヨリテ設置セラレタルモノノ如クナルベシト規定セリ。  
二十二、千八百八十一年十月二十五日女皇ハ千八百八十一年ノ日清樞密院令ヲ制定セリ。

該院令ニハ本令ニ於テ日本ト稱スルハ□□□□ノ版圖ヲ指シ、英國臣民ト稱スルハ出産又ハ  
歸化ニ因リテ女皇ノ臣民トナリタルモノヲ指シ、外國人ト稱スルハ支那皇帝又ハ□□□□ノ  
臣民若クハ女皇ト親密ナル其他ノ國ノ臣民又ハ市民ヲ指スナリト規定セリ。

此千八百八十一年ノ日清院令ハ前ニ掲ゲタル千八百六十五年ノ院令第十七條ノ外國人ヨリ  
提起シ、又ハ外國人ニ對シテ提起スル訴訟ニ關スルノ規定ヲ廢止シ、之ニ代フルニ第四十七  
條ノ規定ヲ以テセリ。該條ハ(イ)ヨリ(ヘ)ニ至ル數項ヨリ成レリ今其(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)  
(ヘ)ノ條項ヲ擧グレバ左ノ如シ。

(イ) 外國人英國臣民ニ對シテ民事訴訟ヲ起サント欲スルカ、又ハ英國臣民外國人ニ對シテ  
民事訴訟ヲ起サント欲スルトキハ、在日清法廷及ビ區裁判所ハ各自其裁判權ニ從ヒテ之ヲ受  
理審問判定スルコトヲ得、若シ總テノ當事者之ヲ希望スルカ、又ハ法廷之ヲ命ジテ陪審官若  
クハ評價人ヲシテ審判ヲ爲サシムルハ總テノ當事者英國人ニシテ該審判ヲ許スト同一ノ場合  
ニ限ル、其他ノ事ニ關シテハ法廷ノ通常ノ規則ニ從フ。

(ロ) 外國人ハ先ヅ當法廷ノ裁判權ニ服從スルコトニ關シテ自國ノ官廳ヨリ其同意書ヲ得テ

之ヲ法廷ニ呈出シ、且法廷ノ要求アルトキハ手數料賠償金及ビ諸般ノ費用ヲ支拂フ爲メ並ニ  
當法廷若クハ上訴法廷ノ下スベキ判決ヲ履行スル爲メ、供托其他ノ方法ニヨリテ法廷ノ満足  
スル丈クニ又法廷ノ命ズル丈ノ金額ヲ保證トシテ差出スベキ旨ヲ規定セリ。

(ハ) 當法廷ノ裁判權ニ服從シタル外國人ニシテ原告トナレル者ニ對シ、被告ヨリ反求又ハ  
反訴ヲ起サントスルニハ先ヅ法廷ノ許可ヲ受ケザルベカラズ。

(ニ) 法廷ハ之ガ許可ヲ與フル前ニ被告ヨリ其請求ノ現ニ争ヒ居ル事項ヨリ生ゼシコト、及  
ビ反求ヲ爲スニハ相當理由アリテ決シテ單ニ訴訟ヲ攪亂シ或ハ之ヲ延滞セシムルガ爲メニ爲  
スモノニアラザルコトノ證明ヲ爲サシムベシ。

(ホ) 此規定ハ原告ガ外人タリシ訴訟ノ終リシ後ニ於テ被告ヨリ其外國人ニ對シテ訴訟ヲ提  
起スルコトヲ決シテ妨グルモノニアラズ。本院令ニ反求又ハ反訴ニ關スル規定ヲ挿入セルガ  
爲メ、被告ノ外國人ニ對シテ訴訟ヲ提起スルヲ決シテ妨グルモノニアラズ。

(ヘ) 一ノ訴訟ニ於テ外國人ヨリ英國臣民タル被告ニ對シテ訴訟ヲ起シ、而シテ他ノ訴訟ニ  
於テ該被告タル英國臣民原告ト爲リ、而シテ該外國人被告トナル場合ニ法廷ハ英國臣民ヲ請  
求ニヨリ其訴訟ノ繫屬中命令ノ強行ヲ停止シ、而シテ一ノ訴訟ニ於テ一方ノ支拂フベキモノ  
ト決セラレタル金額ト他ノ訴訟ニ於テ他方ノ支拂フベキモノト決セラレタル金額トヲ相殺ス



ルコトヲ得。

前述ノ(ロ)項ハ千八百八十六年ノ支那日本朝鮮樞密院令ニヨリテ廢止セラレ、之ニ代フルニ左ノ規定ヲ以テセラレタリ。

(ロ) 外國人ハ(一)先ヅ法廷ノ裁判權ニ服從スル自己ノ同意ヲ提出シ(二)若シ法廷ノ要求アルトキハ自國政府ノ適當ナル官廳ヨリシテ此人ノ或ル事件ニ關シテ貴法廷ノ裁判權ニ服從スルコトニ關シ本政府ハ異議ナシトノ趣キヲ記載セル證書ヲ得テ之ヲ提出シ且(三)若シ法廷ノ要求アルトキハ手數料賠償金及諸般ノ費用ヲ支拂フ爲メ並ニ當法廷若シクハ上訴法廷ノ下スベキ判決ヲ履行スル爲メ金錢ノ供托其他ノ方法ニヨリテ法廷ノ満足スル丈ケニ又法廷ノ命ズル丈ノ金額ヲ保證トシテ差出スベキ旨ヲ規定セリ。

二十三、在日本法廷ノ判官モワツト君ノ判決ハ原告ヲ勝訴トナセルナリ。氏ハ右第五十五則ハ日本臣民ヨリ該法廷ニ提起セル訴訟ニ其適用ヲ限ルト否トヲ問ハズ、到底本件ニ適用スベキモノニアラズトシテ原告ノ利益ニ判決シ、衝突ノ起リシ場所ハ日本帝國ノ中ナルガ故ニ、衝突ニ適用スベキ法律ハ日本國法ナリ、日本國法ニヨレバ□□ハ其臣僕ノ懈怠ニ對シテ責ヲ負ハザルヲ以テ、懈怠ノ行爲ヨリ生ジタル損害ニ對シテ英國ノ法廷ニ出訴セラルルノ理由ナク、決シテ訴訟ニ於テ其責ヲ有セザルモノナリ。從テ□□ニ責任ヲ歸セシメントスルノ反求

ハ之ヲ許ス可カラザルモノナリト云ヘリ。賢明ナル判官ハ左ノ如ク言ヘリ。

「從テ代言人ノ間ニ一ノ合意ヲ爲シ請願ニ關スル判決ヲ爲スガ爲メニ、彼ノ問題ヲ全ク余ニ委付シ去リ、余ノ手ニ付セラレタル海國及ビ有效ナル參考物ノ助ニ據リテ之ガ斷定ヲ爲スベキコトヲ委セリ。

「余ハ彼ノ衝突ノ國際法上所謂日本ノ領海ニ於テ起リシモノタルヲ疑ハザルナリ。請願書ノ記スル處ニヨレバ千島ハ殆ト兩斷セラレテ直チニ沈没ノ場所ハ東經百三十二度四十分北緯三十三度五十六分二十秒ニシテ、又答辯書ニハ衝突ノ以前及ビ其當時ハ兩船ハ睦月及興居兩島ノ中間興居島海峽ト稱スル細海峽ニアリシト云ヘリ。此二島ハ内海ノ中ニアリ、而シテ該内海ハ東西二百四十哩ニ互リ陸地ヲ以テ圍繞セラルル諸港灣ノ接續セルモノニシテ、世ニ日本内海ト稱スルモノナリ。北海ハ四個ノ入口ヲ有シ、中二個ハ非常ニ細小ニシテ、又一ハ其幅員二哩ヨリ少ナク、他ノ一ハ二派ニ分レ其廣キモノノ幅員ハ大凡四哩ナリ。答辯書ニ云ヘル興居島ハ四國ノ北岸ニ近接セリ、四國ハ日本四大島ノ一ニシテ東部ニ於テ内海ノ南境ヲナスモノナリ。答辯書ニ於テ衝突ノ場所トイヘル興居睦月間ノ海峽ノ幅員ハ二哩ニ及バズ、而シテ實際ニ兩船ノ衝突セシ所ハ四國ノ近岸ヨリ三哩ヲ隔テザルナリ。此等ノ事實ニ據ルトキハ何レノ點ヨリスルモ衝突ノ日本内海ニ起リシヲ爭フヲ得ザルナリ。



二十四、日本法廷ノ判決ヲ破毀セル在日清上等法廷ノ判決ハ主トシテ左ノ三理由ニ基キテ之ヲ下セルモノナリ。

一、訴訟手續規則ト樞密院令ハ法廷ニ附スルニ反求ヲ許スルノ命令及ヒ保證ヲ供セシムルノ命令ヲ與フルコトヲ以テシ、而シテ此會則ハ決シテ條約ノ規定ニ違背スルモノニアラザルナリ。

二、樞密院令ナシトスルモ法廷固有ノ職權上反求ヲ爲スコトヲ許シ、且ツ保證ヲ供スルノ命令ヲ下スヲ得ルナリ。

三、衝突ハ日本帝國ノ區域内ニ起リシニアラズ、公海ニ於テ起リシモノナリ。

二十五、上訴人ハ此前二個ノ理由ハ法律上ノ誤謬ヲ有スト主張スル者ニシテ其理由ハ後ニ述ブベシ。

第三ノ理由ニ至リテハ衝突ノ起リシ場所タル、興居島海峽ハ果シテ日本帝國ノ領海内ニアリヤ否ヤ問題ヲ惹起ス。

上訴人ハ彼ノ海峽ノ位置ヲ日本帝國ノ領土上ヨリ觀察ヲ下シ衝突ノ場所ハ日本領海ノ一部ナリト主張スルモノナリ。

二十六、裁判長ハアル事實ニ基キテ衝突ノ場所ノ日本帝國ノ版圖ニアラザルコトヲ判定セリト

雖ドモ、其事實ヲ證スルニ何等有力ノ認憑又ハ公書ヲモ與ヘザルナリ。

閣下ハ左ノ如ク云ヘリ。

「衝突ノ場所ハ萬國ノ公道タルコト疑ナシ。吾人ハ知レリ、現今支那ヨリ亞米利加ノ西岸ニ航行スル郵船ハ殆ト凡テ此衝突ノ場所ヲ通過スルヲ、又歷史上ヨリ知レリ、曾テ此内海ニ入ルコトヲ停止セラレタル際之ヲ通過スルノ權ハ英佛蘭米ノ兵力ニ依リテ主張セラレ而シテ日本政府ノ承認スル所トナリシコトヲ……」ト。

二十七、上訴人ハ此衝突ノ場所ハ之ヲ□□□□ノ版圖ニアラズシテ日本國法ノ適用ヲ受ケザルモノトスルコトニ違議ヲ唱ヘ、又此内海ヲ往來スル日本船舶ニ適用スルニ日本國法以外ノ法律ヲ以テスベキモノトスルコトニ事實ノ上ヨリ違議ヲ唱フルモノナリ。

上訴人ハ裁判長ノ示セル歷史上ノ事實ハ誤謬ナリト主張スルモノナリ。附録ニ示セル公文書類ニシテ上訴人ノ參照セントスルモノハ日本領海ノ歴史ノ左ノ如クナルコトヲ明示ス。

二十八、衝突ノ起リシ内海ハ日本領土ニヨリテ圍繞セラレ從テ□□□□ノ領土ノ一部分タリ、□□□□ノ諸外國人民モ皆常ニ之ヲ日本領海トシテ取扱ヒ居レリ。

二十九、是レ左ノ事實ニヨリテ確證セラル千八百五十四年日本ト諸外國トノ間ニ初メテ條約ヲ結ビシ際、日本全土及ビ内海其他ノ領海ニハ盡ク外人ノ入來スルコトヲ拒絶シ此領土及ビ領



海ニ入ルヲ得ルハ唯特別ノ場合ニ之ガ認可ヲ得タルトキニ限レリ。

千八百五十四年以前ニハ何國モ未ダ曾テ此内海ヲ公道ノ一部分トシ、航行スルノ權利ヲ有セリト主張シテ其航海ヲ試ミシモノアラザルナリ。裁判長判決ニ於テ支那ヨリ亞米利加ノ西岸ニ航行スル郵船ハ總テ日本内海ヲ通過スト云ヘルハ決シテ事實ヲ得タルモノニアラザルナリ。支那ヨリ亞米利加ニ直航スル汽船ノ航路ハ日本ノ南ニ在リ、唯支那ヨリ來リテ日本諸港ニ寄港セントスルモノノミ此内海ヲ通過スルナリ。

三十、實ニ内海ハ唯長崎ヨリ神戸港ニ通航スル外國船ニヨリテ使用セラルルノミ(神戸港トハ條約中ニ云ヘル兵庫港ノコトナリ)而シテ此ノ内海ヲ通過スルノ權ハ唯此諸港ヲ外國臣民ノ爲メニ開ケル條約ニヨリテ諸外國ニ讓與セラレタルモノニ過ギズ。日本政府ハ條約ニヨリテ歐洲諸國及ビ北米合衆國ニ數多ノ權利ヲ與へ、其中ニ或ル日本ノ諸港ニ入津スルノ權利ヲモ包含セシメタリ。然ルニ千八百六十三年ニ至リ長州侯亂ヲ興シ、日本政府ノ曾テ條約國人ニ與ヘタリシ特權ヲ破滅センコトヲ企テタリ。侯ハ内海ノ西口タル下ノ關ノ海峽ヲ領シテ條約國ノ船舶ヲ妨害シ、海岸ニ砲臺ヲ築キテ其内海ニ入ルヲ妨ゲン事ヲ試ミタリキ。之ガ爲メニ千八百六十三年七月二十五日在日本英佛蘭米ノ公使間ニ約ヲ爲シ、若シ日本政府ニシテ此ノ反亂ヲ鎮壓スルコトヲ爲サザルニ於テハ此諸國ノ條約上ノ權利ヲ保存センニハ直チニ其聯合

艦隊ヲシテ長州侯ノ築ケル城砦ヲ砲撃セシメ、以テ内海ノ通口ヲ再ビ開放セザルベカラズト合意セリ。日本政府ハ叛侯ノ舉動ヲ非認セリ、諸國ハ總テ政府ノ處置ヲ正當ナリトシ、反亂ノ鎮壓ヲ助クル爲メニ合同ノ働キヲ爲サンコトヲ決定セリ。就中大英國ハ政府ノ處置ヲ正當ト認メ、千八百六十四年七月二十一日英國公使ヨリ長州侯ノ役人ニ送リシ文書中ニモ之ヲ認メタリ。千八百六十四年七月二十二日在日本英佛蘭米ノ公使等ハ下ノ關海峽及ビ其他ノ場所ニ於テ長州侯ニ對シテ強制スベキ手段ニ關スル約定書ヲ作り、且日本政府ニ同一ノ書類ヲ呈出シテ條約諸國ガ反亂ノ鎮壓ヲ助ケテ條約上既得ノ權利ヲ保存スルニ關シ取ルベキノ手段ヲ開示センコトヲ合意セリ。

千八百六十四年八月十五日前掲諸公使ハ尙一ノ約定書ヲ作り各國海軍司令官ヲ橫濱ニ招集シ、以テ下ノ關海峽ヲ開キテ長州叛侯ノ砲臺ヲ破壊シ而シテ其武備ヲ奪取スル爲メニ速カニ進行セシメンコトヲ合意セリ。

此事件ノ發生ニ先チ千八百六十四年六月二十日巴里ニ於テ日本佛國兩政府ノ間ニ一ノ約定ヲ爲シ、其第二條ニ日本政府ハ長州叛侯ノ爲シタル妨害ヲ除キ、佛國船舶ヲシテ自由ニ下ノ關海峽ヲ通過スルコトヲ得セシムベシト約セリ。然ルニ日本政府ハ此合意ヲ履行スルノ力ナシトテ此約定ノ確認ヲ拒ミシヲ以テ、千八百六十四年八月二十五日日本政府ノ不確認ニ關シテ



英佛蘭米ノ諸公侯間ニ再ビ約定ヲ爲シ、横濱ニ滞在セル各國艦隊司令官ニ更ニ訓令ヲ下シ長州侯ニ對シテ直チニ前述ノ手段ヲ採ルベキ旨ヲ命ゼリ。

上訴人ハ條約諸國ト日本政府トノ間ニ、或ハ條約諸國ト長州叛侯トノ間ニ或ハ又條約諸國ノ公使間ニ取換ハシタル前述ノ諸條約及ビ諸文書ハ能ク上海裁判長ノ言ノ誤謬ナルコト、竝ビニ日本内海及ビ下ノ關海峡ニ入ルノ權利ノ全ク諸國ト日本政府トノ間ニ締結セル條約ニ基クモノナルヲ主張スルモノナリ。

三十一、日本政府ハ常ニ内海ノ日本領土ノ一部ナルコトヲ固守シ千八百七十年佛獨戰爭ノ起ルニ際シ重モナル諸國ノ公使ニ内海ノ局外中立ヲ通告シタリキ。

三十二、上訴人ハ主トシテ左ノ理由ニ基キテ在日清法廷ノ判決ノ誤謬ニシテ破毀セザル可ラザルモノタルコト、及ビ在日本法廷ノ判決ヲ是認セザル可ラザル旨ヲ述ブ。

### 理 由

一、條約ニ由レバ在日本法廷ノ裁判權中ニハ英國臣民外ノ人ニ對スル爭訴ヲ受理スルノ權限ナキヲ以テ條約上何人モ同法廷ニ於テ日本人ニ對シテ反對ヲナスコトヲ得ズ。

二、外國人ヨリ爲シ又ハ外國人ニ對シテ爲ス訴訟及ビ反訴ニ關スル樞密院令及訴訟手續規則ハ

本件ニ適用セラレズ。

三、該法廷ハ本件ニ於テ賠償ヲ得ルノ目的ヲ以テ提起スル反訴ヲ受理スルニ付キテハ固有ノ管轄權モナケレバ又默示ノ權限モアルコトナシ。殊ニ前掲ノ諸條約ヲ見レバ此事益々明瞭トナルナリ。

四、條約ニ由レバ原告ハ在日本法廷ニ本件ヲ提起スルノ權利アリ。而シテ原告ヨリ之ヲ提起シタリトテ被告ハ原告ニ對シテ自己ノ蒙ムリシ損害ノ賠償ヲ本廷ニ請求スルノ權ナシ。

五、如何ナル場合ニ於テモ被告ハ日本ノ法廷ニ起訴シ能ハザル事件ニ關シ茲ニ反求ヲ爲ス權ナシ。

六、被告ノ反訴ヲ爲スハ原告ノ請求ヲ拒ムノ目的ヲ以テスルモノニアラズシテ唯千島航海者ノ過失又ハ懈怠ヨリ生ズル損害ノ賠償ヲ得ントスルノ目的ヲ以テスルモノナリ。

七、英法ヲ本件ニ適用スベキモノトスレバ、英法ニ由レバ主權者ハ其臣僕ノ過失又ハ懈怠ニ對シテ責ヲ負ハズ。

八、被告ノ主張セル千島乗組員ノ過失懈怠ハ日本國法ヲ適用スベキノ場所ニ於テ起レリ、而シテ日本ノ國法ニ由レバ上訴人ハ千島乗組員ノ過失懈怠ニ對シテ責ヲ負ハザルナリ。

九、如何ナル場合ニ於テモ保證ヲ供セシムルノ命令ヲ許與セラレザリシナリ。



- 十、本件ハ物的訴訟ニアラズ。
- 十一、在日本法廷ニシテ反訴ヲ拒否スルノ權限アルモノトスレバ、該法廷ハ條約及ビ本件ノ諸狀況ヲ參照シ其職權ニ由リテ反訴ヲ許可セザルコトニ判定セシハ至當ナリ。
- 十二、在日本法廷ノ命令ハ正當ニシテ在日清法廷ノ命令ハ誤謬ナリ。

アーサー、コーヘン  
 ウオルター、ジー、エフ、フキリモール  
 エチ、エス、コートリー  
 エフ、エー、サトー

上訴人ノ爲メニ呈出セル表目

參照目錄

- 一、日英條約及ビ其説明 一八五四年 十月十四日
- 二、日英條約ノ拔萃 一八五五年 十月十八日
- 三、日米條約ノ拔萃 一八五八年 八月二十六日
- 一八五八年 七月二十九日

- 四、日墮條約ノ拔萃 一八六九年 十月十八日
- 五、樞密院令ノ拔萃 一八五九年 三月三日
- 六、樞密院令 一八六四年 一月七日
- 七、樞密院令ノ拔萃 一八六五年 三月九日
- 八、樞密院令 一八六九年 五月十三日
- 九、樞密院令ノ拔萃 一八七八年 八月十日
- 十、樞密院令ノ拔萃 一八八一年 十月二十五日
- 十一、樞密院令 一八八六年 八月三日
- 十二、在日本法廷ノ規則 一八六五年 五月四日
- 十三、在日本法廷ノ海軍事件ノ訴訟手續規則 一八六七年 九月九日
- 十四、或ル日本港ノ開放ヲ延期スル書類 一八六二年 六月六日
- 十五、内海ヲ再開スルコトニ關スル條約諸國間ノ合意 一八六三年 十月二十五日
- 十六、日佛間ノ巴里約定 一八六四年 六月二十日
- 十七、長州侯ノ役人ニ與ヘシ書類 一八六四年 七月二十日
- 十八、長州侯ニ對シテ探ルベキ強制手段ニ關スル書類 一八六四年 七月二十二日



十九、長州侯ニ對スル強制手段ニ關シテ條約諸國間ニ  
作為シタル書類

一八六四年 八月十五日

二十、下ノ關海峽ノ開放ニ關セル巴里約定ノ不確認ニ  
關スル書類

一八六四年 八月二十五日

二十一、賠償ニ關シテ諸條約國ト日本トノ間ニ  
爲セル約定

一八六四年 十月二十二日

二十二、賠償金ノ配當ニ關シテ條約國ノ間ニ爲セル書類

一八六四年 十月二十二日

二十三、賠償ニ關スル約定ヲ日本ガ追認セシ事

一八六四年 十一月四日

二十四、千八百七十年ニ日本ガ爲シタル局外中立ノ宣言

一八七〇年 八月

二十五、同事ヲ通告シタル日本外務省ヨリノ文書

一八七〇年 八月 八月

二十六、マチン船事件

一八八四年 十一月十九日

二十七、女王對スカルフキールトノ件

一八七七年 五月 十日

二十八、大島屋商會對レーネル商會ノ件

一八八九年 八月 十二日

二十九、東京府對バツチエルダーノ件

一八七六年 十二月 二日

三十、クワンツン及ヒキュートツアイフアー

一八七五年 二月 十日

三十一、本件ニ於ケル原告ノ名義ニ關スル  
答辯ニ付テノ手續

一八九三年 五月 二十五日

清水市太郎 閱  
松波仁一郎 譯



# 英國樞密院軍艦千島衝突反訴事件判決 (譯文)

## 判決命令

原告代人ノ請求セル被告ガ本訴一切ノ損害賠償及ビ訴訟費用(被告ガ原告ニ支拂フベキ旨判決サレタル訴訟入費ヲ除キ)ノ完済トシテ英貨一萬磅ヲ原告ニ支拂フコト、ニヨリ本法廷ハ原被兩告ノ協議ニヨリ向後本件一切ノ訴訟手續ヲ停止ス但既ニ判決アリタル訴訟入費支拂ニ關シ必要ナル手續ヲ取ルハ此限リニアラズ

予ハ右異議ナク同意致セリ

被告代言

アイ、エフ、ラウダー

在橫濱  
英國領事  
裁判所印

千八百九十五年九月十九日

## 裁判報告 (一千八百九十五年七月三日)

樞密院司法委員

現員   ロードハーシエル   ロードワットソン   ロドホツプハウス   ロードモーリス  
 ロードダヴェー   サー、リチャードカウチ

### 帝國日本政府對ペニンシユラル、エンド オリエンタル汽船會社訴訟事件

本訴ハ女王陛下ノ在日本裁判所ノ判決ヲ破棄シタル貌列顛女王陛下ノ支那及日本上等裁判所(海事裁判所)ノ判決ヲ不當トシテ日本政府ノ提出シタル控訴事件ニシテ國際上重要ナル問題數多ヲ包含スルモノナリ。

控訴狀師ハアーサー、コーヘン(キューシー)   サー、オルター、ヒルリモール(キューシー)   エツ  
 チエスコートレー   エフ、サトノ四氏被告狀師ハサー、リチャード、ウエブスター(キューシー)  
 ヒンレー(キューシー)   イーエチ、ポラード   ゼー、ダブルユー、マツカジーノ四氏ニシテサー、ロバ  
 ートライド(キューシー)   サー、クランクロックード(キューシー)   及ヘンリー、サットンノ三氏王

英國樞密院軍艦千島衝突反訴事件判決



ノ爲メニ本訴ヲ監視ス。

口頭辯論ハ去ル五月(廿一日)ヲ以テ開始ス。英國大法官(ロード・ハルシエル)、ロード・ワットソン、ロード・ホウツプ・ハウス、ロード・マクネーテン、ロード・シヤンド、ロード・ダヴェー、サー、リチャード・カウチノ諸公ヲ以テ組織シタル法廷ニ於テ開カレ數日ヲ經テ終結セリ。

ロード・ハルシエル委員ノ判決ヲ陳述シテ曰ク、本訴ハ在支那及日本貌列顛領事裁判所ノ有スル裁判權ニ關シ頗ル重要ノ問題トス。而レドモ事實ハ固ヨリ狹隘ノ範圍舊ニ在リ一千八百九十二年十一月日本海岸近傍興居島海峽ニ於テ□□□□□□ノ巡洋艦千島ト被告所有ノ汽船「ラベンナ」號ト衝突シ千島ハ殆ンド即時ニ沈没シ「ラベンナ」亦タ幾分ノ損害ヲ受ケタリ。一千八百九十三年五月在日本女王陛下ノ裁判所へ上訴人ハ被上訴人ニ對スル訴訟ヲ提出シ、千島沈没ノ不幸ハ「ラベンナ」乗組員ノ過失怠慢ニ由リ起リ、千島ノ乗員ニハ全ク非難ス可キ所ナク、上訴人ハ之カ爲メ八十五萬弗ノ損害ヲ受ケタルヲ陳辨セリ。

被上訴人衝突ニ付テハ千島ノ乗組員獨リ其責ニ任ス可ク「ラベンナ」ノ乗員ニハ毫モ非難ス可キ所ナク、且ツ被上訴人ハ之カ爲メ十萬弗ノ損害ヲ受ケタリト答辯セリ。

同年六月六日被上訴人ハ反訴ヲ提出スルノ允許ヲ請ヒ損害賠償トシテ上訴人ヨリ十萬弗ヲ拂ハシメントシ、本訴ト反訴トヲ同時ニ成立セシメ、反訴ノ勝訴ニ歸シタル場合ニ於テハ原告ヲシテ該判

決ヲ遵守遂行セシメンガ爲メ保證金(低當或ハ其他ノ方法ニ據テ)ヲ上訴人ヨリ徵收セラレンコトヲ在日本女王陛下裁判所へ申請セリ。

該裁判所ノ博識ナル法官ハ反訴ノ提出ヲ拒否シテ許サズ、乃チ其理由トスル所ハ衝突ノ場所ハ日本海岸ヲ距ル三哩以内ノ處ニシテ日本ノ領海内ナリ。故ニ千島ノ所有者タル□□□□□□カ該艦乗組士官及船伴ノ怠慢ナル所爲ニ對シ責任ヲ負フ可キヤ否ヤハ日本法律ノ規定スル所ニ據ラザル可カラズ。而シテ日本法律ニ依ルトキハ□□□□□□ハ斯ノ如キ怠慢ノ所爲ニ對シ責任ヲ負フ可キ者ニ非ザルガ故ニ、右怠慢ノ所爲ニ關シテハ□□□□□□ニ對シテ訴訟ヲ提起ス可ラザルモノトス。故ニ反訴ハ之ヲ提出スルヲ得ズ。加之前述ノ理由ニ因ラザルモ本法廷ハ反訴ヲ許否スルノ權アリト云フニアリ。

尋デ被上訴人ヨリ在支那及日本女王陛下ノ上等裁判所ニ控訴スルニ及テ該裁判所ハ在日本女王陛下ノ裁判所ノ判決ヲ破棄シ被上訴人ノ申請セル如ク宣告セリ。

上等裁判所ノ主席判事ト下等裁判所ノ法官ノ下セル判決ト意見ヲ異ニセリ。即チ衝突ノ場所ハ日本ノ領海内ニアリトスルモ、該地ハ「無論萬國共用ノ公道」ナレバ、衝突ハ大洋中ニ起リタルモノト認メザル可ラズ。而シテ大洋ハ海上法ノ通用サル、所ニシテ、海上法ニ據ルトキハ船舶ノ所有主ハ自己ノ船舶ノ雇員ノ怠慢ヨリシテ他人ニ蒙ラシメタル損害ニ對シテ責任ヲ負ハザル可ラズ。



樞密院司法委員ハ右上下裁判所ノ法官ガ互ニ見解ヲ異ニセル問題ヲ茲ニ裁決スルヲ以テ不必要ト爲スモノナリ。然レドモ在上海上裁判所ノ主席判事ガ主唱スル所ハ異論極メテ多キ大問題ニシテ、右主席判事ノ主唱セル處ヲ委員ハ准許シタルニアラザルヲ茲ニ一言シ置クヲ以テ正當ト思惟ス。

上等裁判所ノ宣告ヲ執行セシム可キヤ否ヤヲ確定セント欲セバ、委員ハ在□□□□□ノ領事裁判所ニ於テ行ハルル治外法權ノ根元ヲ調査シ、其權限ノ範圍ヲ測定スルヲ以テ必要ト思惟ス。

一千八百五十八年八月二十六日女王陛下ト日本大君トノ間ニ締結セラレ、一千八百五十九年七月十一日ヲ以テ批准セラレタル和親通商條約ニハ、日本臣民英國臣民ニ對シテ罪ヲ犯ストキハ日本有司日本法律ヲ以テ之ヲ罰シ、英國臣民日本臣民或ハ他國ノ臣民ニ對シテ罪ヲ犯ストキハ英國領事或ハ其他ノ裁判權ヲ有スル官吏英國法律ニ據テ之ヲ審問所罰スルモノト規定セリ。該條約中ニハ又左ノ條項(第六條)アリ、即チ「英國臣民日本臣民ニ對スル告訴」ノ項ニハ英國臣民タル者若シ日本臣民ヲ告訴ス可キ理由ヲ有スルトキハ、領事廳ニ赴キテ告訴ス可シ。然ル時ハ領事ハ事件ヲ審理シ穩和ニ處分スルコトヲ勤ム可シトアリ。又日本臣民英國臣民ニ對スル告訴ノ項ニハ、日本臣民若シ英國臣民ヲ告訴ス可キ理由ヲ有スルトキハ、領事ハ公平ニ其告訴ヲ聞キ親切ノ方法ヲ以テ之ヲ處分スルコトヲ努ムベシ。而シテ紛争ノ性質獨リ領事ノ力ヲ以テ穩和ニ處分シ難シト認ムルトキハ、領

事ハ日本有司ノ補助ヲ請ヒ相共ニ事件ヲ審理シ公平裁判ヲ下スベシトアリ。

此ノ條約面ニ據ルトキハ日本人若シ英人ノ破約ニ關シ、或ハ英人ヨリ受ケタル損害ニ對シ訴フル理由ヲ有シ、之ガ訴訟ヲ提起スル場合ニ於テ、英國領事ノ之ヲ受理スル法權ヲ有スルヤヲ觀ルベシ(前述ノ條約文ハ中裁ノ方法ヲ規定セルニ過ギズシテ、未ダ以テ所謂領事裁判權ナルモノヲ與ヘタルニアラズ。該裁判權ヲ得タルハ米澳兩國ニ之ヲ得タル後最惠國條款ニ依リ英國亦初メテ之ヲ得タルナリトス)蓋シ溫和ニ事務局ヲ結了スル能ハザルガ如キ場合ニ在テハ、領事及日本有司ノ合議裁判所ヲ組織シ裁決ヲ之ニ任ス可キ考察ナリシモノノ如シ。然レドモ未ダ曾テ右ノ方法ヲ實行シタコトナカリシナリ。

前記ノ日英條約ヲ締結セル數周日前、即チ一千八百五十八年七月二十九日ニ於テ日本ハ米國ニ條約ヲ締結シ、一千八百六十年五月廿二日ヲ以テ之ヲ批准セシガ、此ノ日米條約中ニハ左ノ規定アリ。第六條日本人ニ對シテ罪ヲ犯シタル米人ハ米國領事裁判所ニ於テ審問シ、有罪ト認ムルトキハ米國法律ニ據テ處罰ス可シ。米國人ニ對シテ罪ヲ犯シタル日本人ハ日本有司之ヲ審問シ、日本法律ニ據テ之ヲ處罰ス可シ。米國領事裁判所ハ日本債主ノ訴訟ヲ受理シ、米國人ニ對スル正當ノ要求支拂ヲ受クルヲ得セシム可シ。又日本裁判所ハ米國債主ノ訴訟ヲ受理シ、日本人ニ對スル正當要求支拂ヲ受クルヲ得セシム可シト。則チ是レ在日本英國領事裁判所ハ米人日本人ニ對シテ罪ヲ犯シタル場合



ニ於ケル而已ナラズ、日本人ヨリ米國人ニ對セル民事要求ノ場合ニ於テモ其裁判權ヲ執行シ得ルコトヲ明認セルモノナリ。而シテ斯ノ如ク米國領事ニ附與セラレタル裁判權ハ、其精神ニ於テ米國領事ノ專斷ニ屬シ、米國人民ハ日本ノ地方裁判所へ訴ヘラレ竝ニ審問ヲ受クルコト無キノ免除ヲ得タルモノナルコト明瞭ナリ。

此條約ノ數年後（一千八百六十九年十月）墺匈ト日本トノ間ニ締結セラレタル條約ハ更ニ此點ヲ明瞭ニ書キ顯ハシタルモノアレドモ、委員ノ意見ハ其實効ニ於テ大差ナシトスルモノナリ。該條約ノ第五條（重要ノ部分ノミヲ掲グ）ハ左ノ如ク規定セリ。人身若クハ財産ニ係ラズ苟クモ權利ニ關スル總テノ問題ニシテ日本ニ住居スル墺匈人民ノ間ニ起レル者ハ墺匈國有司ノ裁判權ニ據テ處理ス可シ。日本有司ハ墺匈國人民ト他ノ條約國人民トノ間ニ生ジタル何等ノ事件ニモ干渉セザル可シ。墺匈國人民若シ日本臣民ニ對シテ苦情ヲ有スルトキハ、日本有司之ヲ裁決シ、之ニ反シ日本人若シ墺匈國臣民ニ對シテ苦情ヲ有スルトキハ墺匈國有司之ヲ裁決ス可シト。

一千八百五十八年八月締結ノ日英條約第二十三條、即チ其最惠國條款ニ據ルトキハ英國臣民モ亦米國及墺匈國臣民ガ條約ニ依テ得タル總テノ免許及免除ヲ享受ス可キコト明瞭ナルヲ以テ、日本人英國人ニ對シテ苦情ヲ有シ之ヲ訴フル場合ニハ之ヲ判決スベキ裁判所ハ日本ノ地方裁判所ニ非ズシテ日本ニ於テ治外法權ヲ執行スル英國有司ナル可キヲ要求ス可キ權利ヲ該英國人ハ有スルヤ亦疑ナシト雖ドモ、英國臣民ニシテ若シ日本臣民ニ對シ苦情ヲ有スルトキハ日本裁判所之ヲ裁決ス可キコトモ亦明瞭ナリトス。

抑モ前記ノ如キ條約ヲ設ケ地方裁判所ノ（日本裁判所ヲ云フ以下之ニ倣フ）裁判ヲ受クルコトヲ免レシメ、換フルニ自國裁判所ノ治外法權ヲ以テシタル所以ハ、之ヲ知ルニ難カラズ、凡テ東洋諸國ト締結セル條約ニ於テ治外法權ヲ存スル理由ハ人ノ熟知スル所ニシテ、日本トノ條約締結以前ニ於テ已ニ其實行セラレタル所ナリトス。而シテ其原因ハ所元ト地方裁判所及其治罪法ノ不信用ナルニアリ。蓋シ法律ニ關スル東洋諸國ノ思想ハ全ク西洋文明ノ意向ト一致セザレバナリ。輒近日本ハ偉大ノ改革ヲ成就シタルヲ以テ、嚮ニ該國ニ治外法權ヲ執行スルノ希望ヲ起サシメタル事情ハ今ヤ其形跡ヲ沒シツツ有リ、或ハ全ク沒セリト謂フヲ得ベシト雖ドモ、然レドモ正シク條約ノ效果ヲ測知セント欲スレバ初メ條約ヲ締結シタル時ニ存立シタル事情ト、條約ニ依テ護收セント努メタル目的トヲ記憶ニ存スルコト必要ナリ。

是ヨリ被上訴人が許可ヲ請フテ竟ニ得タル反求（單ニ抗辯ノ理由トナスニ止マリ、原告ノ請求ニシテ立タサルトキハ從テ同法廷ニテハ消滅スルモノ）ノ性質ヲ精査スルコト便利ナラン。蓋シ該反求ハ其實反訴（原告ノ請求立ツト立タザルトニ論ナク、反訴請求額ニ對シテハ被告ガ原告トナリ原告ガ被告トナル）ニ外ナラズシテ、被告ノ之ヲ以テ却テ自ラ原告ノ位置ニ立チ、一二千島乘員ノ怠



慢ニ依テ蒙レリト爲ス損害額十萬弗ヲ現上訴人ヨリ賠償セシメントスルモノナリ。而シテ被上訴人尙訴ヲ起スヤ、元ト之ヲ以テ單ニ上訴人ノ訴訟ニ對スル防禦ノ盾ト爲スニ非ズシテ上訴人ヲ追撃スルノ矛ト爲セシナリ。何トナレバ上訴人ノ訴訟若シ失敗ニ歸スルトキハ、被上訴人ハ既ニ反訴ヲ提出セル故ヲ以テ上訴人ヨリ拾萬弗ヲ賠償セラレタルノ判決ヲ得ベク、而シテ豫ジメ上訴人ヨリ保證金ヲ徵收シ置キ、己ノ勝訴タル場合ニ於テ自己ノ損害賠償ニ充テント爲セルモノナレバナリ。

被告ノ提出シタル請求ニシテ反求ニ非ズンバ英國領事裁判所ガ日本臣民ニ對スル斯ノ如キ訴訟ヲ受理スルノ法權ヲ有セザルヤ喋々辯論スルノ要ナク、被上訴人ノ請求ヲ提出スベキ適當場所ハ當然日本裁判所ナルコト論ヲ俟タズ。然ルニ或ハ曰ク今回ノ場合タル元ト日本人ガ英國領事裁判所ヘ出訴シタルニ由テ起レルモノニシテ、被告ノ反求ハ假令反訴ノ性質ヲ帶ブルニモセヨ、其ノ之ヲ提出スルニ至レルハ固ヨリ行掛ノ事情ニ在ルニ因ルヲ以テ、斯ノ如キ關係ヲ有スル要求ハ元ヨリ之ヲ許サバルヲ得ズ。且ツ原被告兩告ノ間ニ完全ノ裁判ヲ下サント欲スレバ固ヨリ之ヲ許スヲ以テ必要トスレバナリト論ズルモノアリ。

委員ハ英國ノ裁判所ニ於テスラ漸ク近年斯ノ如キ反求ヲ受理スルコト一般ノ慣習ト爲レルヲ認ムト雖ドモ、姑ク之ヲ論ゼズ、本論ハ元ト領事裁判所ガ執行シ得ル裁判權ノ範圍ヲ精査セズ、輕々ニ看過セルニ因テ起レルモノト云ハザルヲ得ズ。領事裁判所ナル者ハ元ト英國臣民ニ對スル告訴ヲ承

認スルノ專權ヲ有シ、地方裁判所ハ之ヲ裁判スル法權ヲ有セズト雖ドモ、日本臣民ニ對スル要求ニ關シテハ之ヲ裁判ス可キ者ハ獨リ□□□□ノ裁判所アルノミ（日本人及日本政府ノ許諾シテ之ヲ他ニ委任シタル場合ヲ除ク）而シテ其ノ自然ノ權利ハ決シテ褫奪ス可ラザルモノナリ。日英條約上ニモ實ニ之ヲ明認セルニアラズヤ。然レドモ或ハ曰ク日本人自ラ好デ英國領事裁判所ニ出訴セバ、總テノ關係ニ於テ該裁判所ノ裁判權ニ服從セザル可ラズ、故ニ該裁判所ノ慣習手續ヲ管理スベキ法規ニ據リ被告ノ反求ヲ提起ス可キ權利ヲ有スルトキハ、原告ハ之ニ關スル裁判ニ服從スルノ義務ヲ免ル、コト能ハズ、然ル所以ノ者ハ原告ニハ元ト自ラ領事裁判所ニ出訴スルコトヲ撰擇セリ、故ニ其撰擇ノ結果ヲ受クルコト固ヨリ當然ナルニ因ルナリト、然レドモ委員ノ思惟スル所ハ之ヲ以テ全ク事情ヲ誤了スル者ト爲スニアリ、抑モ上訴人ガ損害要償ヲ目的トシテ領事裁判所ヘ出訴シタルハ自ラ撰擇シテ茲ニ出デタルニ非ズ。已ヲ得ザルニ因ルナリ。何トナレバ被上訴人ハ和親條約ニ依テ地方裁判所ノ裁判ヲ受クルヲ免レタルト同時ニ、上訴人ハ之ニ出訴スルノ途ヲ失ヒ、唯ダ領事裁判所ヘ出訴スルノ一途アルノミニシテ彼是撰擇スル能ハザレバナリ。而シテ日本人ガ英國領事裁判所ニ出訴スルニ當テ、該裁判所ハ如何ナル理由ニ依テ英國人ガ日本人ニ對スル要求ヲ承認シ、且裁判セントスルヤハ了解シ難シ。委員ノ所見ハ英國領事裁判所ニ於テ若シ敢テ之ヲ受理セバ條約違反ナリ、且ツ若シ此ノ如キ異議ニ服從セザル可ラズトセバ、當初日本ノ主體權者ガ其主權ノ一部ヲ



割テ英國領事裁判所ニ讓與シタル裁判權ノ範圍外ニ出デタル越權ノ所爲ト爲サルヲ得ズ。

抑モ日本裁判所ニ於テ英國人ガ日本人ニ對スル要求ノ訴訟ヲ專裁スル權利ハ英國領事裁判所ニ於テ英國臣民ニ對スル訴訟及苦情ヲ專裁スル權利ト正シク同一ノ基礎ニ據ルモノニシテ、此點ハ重要ノ關係ヲ有スルモノトス。何トナレバ今被上訴人ノ辯論ニシテ適當ノ理由アリトスレバ、英國臣民ガ日本人或ハ支那人ニ對スル要求ニ關シ日本或ハ支那ノ裁判所へ出訴スル場合ニ於テモ亦之ヲ適用シ得ル筈ナレバナリ。而シテ日本及支那ノ裁判所ハ英國臣民ニ對スル反求ヲ許容シ、金額ノ多寡ニ係ラズ請求ノ金額ニ超越スルヲ論ゼズ、反求ニ充ツ可キ保證金ヲ納付センコトヲ命令シ、其納付ヲ終ルマデハ裁判ヲ執行セザル事ヲ得ベシ。

果シテ然ランニハ英國臣民ハ既ニ條約ニ依テ英國領事裁判所ノ專裁ニ屬セシ事件ヲ將テ之ヲ日本或ハ支那地方裁判所ノ擅斷ニ任ズルニアラザレバ日本或ハ支那地方裁判所へ何等ノ請求ヲ呈出シ能ハザルニ至ラン。委員ノ意見ニテハ前述ノ如キ訴訟手續ハ明ニ條約ノ與ヘタル權利ト兩立セザルコト猶恰モ英國領事裁判所ニ日本人ガ起訴スルニ方リ、該日本人ハ自己ニ對スル反求ニ應ジ該裁判所ノ裁判權ヲ服從シ、其判決ニシテ自己ニ不利益ナルトキハ該判決ヲ履行スルニ足ルベキ保證ヲ提供セザル可ラズト爲スノ條件ヲ付セルト毫モ異ナラズ。

或ハ云ハン上訴人ノ抗辯スル所ハ營ニ被上訴人ニ難儀ヲ被ラスノミナラズ、之レガ爲メ被上訴人ノ不便利ヲ醸スコト鮮少ナラズト、蓋シ或ハ然ラン、然レドモ元ト是レ英國臣民ガ地方裁判所へ出訴サルルコトヲ免除サレタルヨリ生ゼシ結果ニシテ、固ヨリ已ムヲ得ザルナリ。是英國臣民ガ右ノ免除ヲ買收シタル代價ニ外ナラズ、然レドモ斯ノ如キ條約ナカリセバ、英國臣民ハ日本ノ裁判所ニ出訴セザル可カラズ。而シテ日本裁判所ハ此場合ニ於テ被告ノ英國臣民タルト、日本臣民タルトヲ問ハズ、完全ノ裁判權ヲ用キテ之ヲ裁判スベシ。故ニ英國臣民タル者ハ單ニ自國ノ領事裁判所ニミ出訴セラル、利益ヲ主張シ、同時ニ領事裁判所ガ實際ニ有スル裁判權ヲ以テ狹隘ナリト反抗スル能ハズ。

委員ノ本件ヲ論ズルヤ、原告(上訴人)ヲ日本臣民ト同一視シテ論斷セリ。然ルニ或ハ曰ク原告(上訴人)ノ提出スル「帝國日本政府」ナル名稱ハ出訴ノ便宜ヲ謀リ、單ニ□□□□ガ之ニ名ヲ假ルノミ。而シテ條約ハ元ト□□□□ニ關係ヲ及ボサズ、唯日本臣民ニ關係スルモノナルガ故ニ、□□□□ニシテ一度英國領事裁判所へ出訴シタル以上ハ、□□□□ハ自ラ好ンデ領事裁判權ニ服從スルコトヲ豫期セシ者ト認定セザル可カラズ。且ツ之ヲ以テ英國臣民ニ對スル損害要償ノ目的ヲ達スル唯一ノ手段ト爲セルモノニアラズト、然レドモ委員ハ此論ニ同意スルコト能ハズ。

抑モ條約ノ解釋ハ其條項ニ顯表セル明白ノ精神意向ニ據ラザル可カラズ。蓋シ之ガ解釋ヲ爲スニ



當テ其言語ノ意義ニ乖戾スルハ固ヨリ非ナリト雖ドモ、亦一字一言盡ク文字ニ拘泥ス可ラズ、彼ノ英國領事裁判所ナル者ハ英國臣民ニ對スル訴訟ヲ裁判スル所ト爲スノミナラズ、亦英國臣民ノ日本臣民ニ對セル罪ヲ犯セルトキ、其罪ニシテ眞ニ□□□□及日本臣民ニ對セル犯罪ナランニハ、亦之ヲ審問處斷スル處トス。此ノ事實ニ據リ又前述セルガ如ク治外法權ノ由來ヲ顧ルトキハ、日本政府ニ於テ英國臣民ニ對シ民事ノ性質ヲ帶ブル訴訟ヲ提起シ其地方裁判所（即日本裁判所）ニ出訴スルニ當テ、英國臣民ヲシテ其裁判ヲ受ケシムルハ條約ノ眞意ニ背クモノト云ハザル可カラズ。（然レバ則チ日本政府ノ領事裁判所へ出訴シタルハ敢テ自ラ好テ茲ニ出テタルニ非ズ、已ヲ得ザルニ因ルナリ）

委員ハ條約ハ本件ノ爭點ヲ決スルノ效力ヲ有スト認メタルガ故ニ既ニ屢々其條款ヲ舉ゲテ之ヲ論辯セリ。

日本及支那領事裁判所ノ裁判法及ビ其規則ニ關スル樞密院令ニ關シ多クノ辯論アリ、而シテ殊ニ注意ヲ喚起セルハ第五十四條及第二百二十七條ニシテ、第五十四條ハ一千八百六十五年ノ制定ニ係リ在上海上等裁判所ハ副海軍裁判所（始審海軍裁判所）ニシテ、此裁判所ハ女王陛下ノ海外所領ニ設置スル副海軍裁判所ニ屬スル總テノ裁判權ヲ有スルノ項ヲ備ヘ、第二百二十七條ハ反訴ノ規定ヲ設ケ反求ノ允許ヲ與フルノ權ヲ裁判官ニ附與シタルモノナリ。又一千八百八十一年（千八百八十六年ノ

樞密院令ヲ以テ修正ス）ノ樞密院令ニ掲ゲタル第四十七條ニ論據ヲ取レルモノアリ、即チ該條ハ反訴或ハ反求ハ當初ニ裁判所ノ允許ヲ得タル時ノ外裁判權ニ服從セル外國人タル原告ニ對シテ提起シ得ベキモノニ非ズト爲スノ項ヲ載スルモノナリ。

本項ノ效力範圍ハ決シテ明瞭ナリト云フヲ得ズ、本件ニ關シ論辯セル博識ノ狀師モ亦其適用ニ關シ其說ヲ一ニセザル所ノモノナリ。何トナレバ本條中ニ裁判權ニ服從セル外國人タル原告トアレドモ、此ノ「裁判權ニ服從セル」ナル一句ハ必ラズ議論ノ種子タラザルヲ得ザレバナリ。然レドモ樞密院令ノ解釋ニ關シテ双方ノ論辯セルモノニ對シテハ委員ハ茲ニ所見ヲ述ブルコトヲ必要トセズ、蓋シ樞密院令ハ條約ニ依テ享受シタル裁判權ヨリモ更ニ廣濶ナル裁判權ヲ領事裁判所ニ附與セシム可ラザルコト明白ナリ。萬一樞密院令ノ條項ニシテ條約ト矛盾スルモノアレバ、領事裁判官ハ樞密院令ノ明文ニ據テ處分シ、而シテ之ガ爲メ損害ヲ被リタルモノハ其政府ノ外交談判ニ依テ其恢復ヲ要求スルヲ得ベシト雖ドモ、今回ノ事件ニ於テハ先ヅ斯ノ如キ困難ヲ生ズルコトナシ。元來條約ノ權利ト樞密院令ノ條項トノ間ニハ衝突ヲ起ス筈ナク、領事裁判權ノ正當ナル範圍ヲ犯サル限リハ總テ條約ニ依リ付與サレタル權利ハ充分ノ效力ヲ有スルモノナリ。

一千八百六十五年ノ樞密院令第四條ニ曰ク、英國臣民間若クハ英國臣民及外國人間ノ紛議ニ於テ其審問ヲ開キ其是非ヲ決スル爲メ、日本及支那ニ於テ執行スル女王陛下ノ裁判權ハ總テ本令ノ條項



ニ據テ執行シ其他ノ方法ニ據ル可ラズト。

是レ裁判權ノ執行法ヲ指定スルモノニシテ、其裁判權ノ何者タルハ元ト外部ヨリ指定セラレ、裁判所自ラ確定シタルモノニ非ザルヲ知ルベシ。加之反求ハ領事裁判所ノ許可ヲ得テ英國臣民ニ對シテ而已提起シ得ベキモノニシテ反求ハ之ヲ許可シ得ル裁判所ニ於テモ初メヨリ命令スベキモノニアラズシテ、請求ヲ待テ後初メテ之ヲ許可ス可キ者ナルノミナラズ、條約ニ據ルトキハ領事裁判權ノ範圍外ニ在ル事項ヲ得テ之ヲ其範圍内ニ置カントスル場合ニ於テ反求ヲ提起スルヲ許可スルトキハ當ニ其權外ニ渉ルノミナラズ又之ヲ違法ト謂ハザル可ラズ。

委員ノ意見ニテハ反求ハ本件ニ於テ許可スベモノニ非ラズト爲スモノナリ。然レドモ元ヨリ以テ被上訴人ガ上訴人ノ請求ニ對シ何等ノ抗辯ヲ用フルコトニ妨害ヲ加ヘズ、何トナレバ被上訴ニシテ若シ千島獨リ衝突ノ批難ス可キコト若クハ「ラベンナ」號ノ批難ス可ラザルコトヲ示スヲ得バ、被告ノ勝訴ニ歸スルヤ疑ナケレバナリ。然レドモ過失双方ニアリトセバ困難ノ問題起ラン。海事裁判所ノ法律ニ據ルトキハ、此ノ場合ニ於テ原告ハ受ケタル損害ノ半分ヨリモ多額ヲ收ケルコト能ハズ、又該裁判所ニ於テ裁判スルモ差支ナキ反訴ノ提出セラレタルモノアランニハ、双方ノ損害ヲ檢定シ各々其半額ヲ負擔ス可キハ明瞭ノ事ナリ。

「サー、エドモンドホーンビー」氏ノ裁判長トナリ開廷シタル支那及日本上等裁判所ノ審問ニ於テ、博識ナル裁判官ハ衝突ノ責兩船ニ在リト爲シ、兩船ノ受ケタル損害ヲ登記所ニ照會シ、各々全損害ノ半額ヲ負擔スベシト宣告シ、其衡平法裁判權ヨリテ與ヘタル裁判ナルコトヲ附言セリ。而シテ此宣告ハ原告ヨリ被告ニ拂フベキ全額數ヲ算シタルニ非ズ、唯ダ原告ノ要求額ヨリ被告要求額丈ヲ減額セシムルニアリ。

英國ノ海事裁判所ニ於テ衝突事件ヲ裁判スルトキハ、衝突ノ責兩船ニアリテ、其原告ハ外國人ナルガ爲メ被告ハ之ニ對シテ反訴ヲ提起スル能ハザル場合ニ在リテハ、該裁判所ハ原告ガ被告ノ受ケタル損害ノ半額ヲ自己ノ請求額ヨリ減ズルコトヲ承諾スルマデハ被告ヲシテ原告ノ受ケタル損害ノ半額ヲ拂フコトヲ差止メルモノトセリ（「ゼ、セリンガバタム」ノ件ウキリアムロビンソン第三卷第三十八頁參照）

今本件ニ於テ衝突ノ責兩船ニアリトセバ、裁判所ハ右二途ノ中何レニ出ルヲ以テ適當ト爲スヤハ之ヲ今日ニ決スルコト尙早シト謂ハザル可ラズ。

依テ委員ハ上海上等裁判所ノ判決ヲ破棄シ在日本女王陛下領事裁判所ノ判決ヲ回復シ、被告ニ於テ本院及上等裁判所ノ入費ヲ拂フベキコトヲ謹デ女王陛下ニ奏上スベシ。

主 理 清水市太郎 校閱  
海軍編修書記 吉田直 溫 翻譯

（圖一面一葉アルモ茲ニ省略ス）

英國樞密院軍艦千島衝突反訴事件判決



### 軍艦千島事件示談案 附理由

彼阿會社ハ仲間判決ニ於テ敗訴シ、今ヤ再ビ本訴ニ取掛ラントスルニ際シ極メテ不安心ヲ感ジ、茲ニ英國外務大臣ニ懇請シ、一個人ノ資格ヲ以テ仲裁ノ勞ヲ取ランコトヲ乞ヘリ。而シテ其訴訟繼續ヲ避ケ示談ヲ纏メンガ爲メニハ、英貨六千磅ヲ原告日本政府ニ拂ヒ渡スベシト云フモ、此金額ニテハ到底示談ニ應ジ難シ。英國法廷ニ於テ船舶衝突ノ事件ニ於テ損害賠償ノ額ヲ定ムルハ即チ左ノ二様ニ出デズ、即チ甲乙二船ノ衝突スルニ當リ、

- 第一 若シ甲船ノミ過失アリタルトキハ甲船ノ噸數ニ（乙船ノ乘員ニ死亡負傷ナキトキハ）八磅ヲ乘ジテ得タル額ヲ損害賠償トシテ乙船所有主ニ拂ヒ、若シ乙船ニ死亡負傷アリタルトキハ死亡負傷ニ對スル損害賠償ト乙船ノ損害ニ對スル損害賠償合計トシテ一噸毎ニ十五磅マデノ責任ヲ有スルモノトス。即チ甲船ノ噸數ニ十五磅ヲ乘ジタル額丈ノ責任ヲ有ス。
  - 第二 甲船乙船共ニ過失アリタルトキハ、双方ノ損害賠償ヲ各半分宛負擔スルモノトス。即チ損害ノ多キ方ヨリ少キ方ヲ減ジ、兩分セル額ヲ損害ノ多キモノニ仕拂フモノトス。
- 以上二法ニヨリテ本件千島ノ場合ヲ計算スレバ左ノ二様ノ額ヲ得。

第一 ラベンナ號獨リ過失アリトシ、從テ該噸數三千二百五十六噸ニ各噸責任英貨十五磅（軍艦ノ蒙ムレル損害ト人命喪失及負傷ニ對スル損害賠償合計額）ヲ乘ジ

$$3256 \times 15 = 48840\text{磅} \quad \text{英} \quad \text{41} = 9.50\text{圓}$$

$$\dots 48840 \times 9.50 = 463980.00$$

第二 千島ラベンナ双方過失アリトセバ前述ノ法定額ニ從ハズ、双方ノ損害ヲ實測シ其額ヲ相扣除シ差ヲ二分セルモノヲ損害少キ方ヨリ多キ方ニ拂收ムルモノトス。即チ我損害八十五萬圓アリトシ彼損害十萬圓アリトセバ、差引七十五萬圓ヲ二分シ三十七萬五千圓ヲ彼ヨリ我ニ支拂フベキヲ通常トスルモ、本件ニ於テ反訴ヲ許サルコト條約ノ明文ニヨリ、且ツ今回ノ判決ニヨリ明カナルヲ以テ、單ニ八十五萬圓ヲ二分シ其額四十二萬五千圓ヲ彼ヨリ我ニ支拂フベキモノトス。

然レバ第一ノ計算額ニ依ルモ、第二ノ計算額ニ依ルモ、彼阿會社ノ申込額六千磅ニテハ到底示談ニ應ジ難シ。抑モ本件ハ水先案内ノ過失ニ對シ、船長船主責任アリヤ否ヤニ依テ決ス。而シテ英國ノ判決例「ガイマンネリング」「アグネス、オットー」及其他ノ先例ニ徵スルニ、某海峡某水ヲ通過スル船舶ハ必ラズ水先案内ヲ雇ヒ入ルベシト法律ノ命ズル場合ニハ、船ノ衝突ニ對シテハ船長及船主ハ責任ナク、單ニ水先案内其ノ責任ヲ負フニ止ル。然レドモ右ノ如ク法律ノ命ゼザル場合ニアリ



テハ水先案内ノ過失ニ對シ船長船主責任アリトナセリ。加之最初ノ場合ニアリテモ水先案内ハ「單ニ生キタル海圖」タルニ止マリ、船長ノ傍ニアリテ海圖ノ用ヲナスニ止マリ、船ノ進退運轉船長ノ命ノ下ニアル間ハ船長及船主ハ水先案内ノ過失ヨリ生ジタル損害ニ對シ責任アリトナセリ。然レバ本件ハ本訴ニ於テモ亦勝算ハ必然ナリト信ズ。然ルヲ今示談スルモノナルヲ以テ少ナクモ双方共ニ過失アリトセル場合ニ、我請求シ得ル額ハ請求セザレバ政府ハ兎モ角國民及議會ノ嘴ヲ如何セン。以上論ジタルガ如クナルヲ以テ、四十二萬五千圓即チ凡ソ四萬二千五百磅ハ要求セザルベカラズ。然リ而シテ英國外務大臣タルモノ假令ヒ一私人ノ資格ヲ以テ本件ニ客嘴スルモ、隱然英國政府ノ餘威ヲ被ムルモノナキヲ得ズ。故ニ實際ノ掛合ニ至テハ宜シク我内閣諸公ノ篤ト協議ヲ要ス本篇ハ唯々標準ヲ六千磅ニ取ルベカラザルコトヲ參考迄ニ縷述セルノミ。

附記 訴訟入費ハ別途トシテ請求スルハ當然ナリ

### 軍艦千島訴訟事件ヲ示談セル理由

軍艦千島ノ件ヲ示談セル理由ヲ詳述スルニ先チ示談ニ關スル事實ノ來歴ヲ略述セン。

示談ニ關スル事實ノ來歴

本年ハ八月十五日在英國公使加藤高明電報ヲ我外務大臣ニ發シテ曰ク、彼阿會社ハ英國外務次官カーズン氏ニ依頼シ、同氏ハ公務上ノ資格ヲ以テセズシテ、彼阿會社ノ爲メニ示談ヲ申込ミ來リ、英貨六千磅ヲ日本政府ニ支拂フニ於テハ、同政府ハ本件ノ示談ヲ遂グルヤ否ヤ、尙ホ他ニ請求スル所アリヤ、會社ノ訴訟證人其他當事者將ニ日本ニ向ケ出發セントスルヲ以テ速カニ回答ヲ要スト。即チ我政府ハ協議ノ末、彼阿會社ニ於テ二萬五千磅及訴訟入費ヲ支拂フニ於テハ示談ヲ遂グベキ旨同月二十一日返電セルニ、同月二十八日發加藤公使ノ電報ニ曰ク、英國外務次官ハ彼阿會社ハ本件示談ノ爲メニ英貨一萬磅迄支拂フベシ。右金額ニテ示談纏マラザルニ於テハ充分ノ證人其他當事者ヲ向フ十日間ニ日本ニ向テ出發セシムベシト申出ラレタリ。速カニ返答アリ度ト、依テ九月三日友誼的精神ヲ以テ我政府ハ彼阿會社ニ於テ本件訴訟費用ノ外ニ英貨一萬磅ヲ支拂フニ於テハ示談ヲ遂グベキ旨返電セリ。同月十日發加藤公使ノ電報ニ曰ク、彼阿會社ハ日本政府ヘ一萬磅ヲ支拂フベキ事ヲ在橫濱ノ代理人ニ電報ヲ發シ、又反訴ノ訴訟入費ヲ支拂ヒ、且ツ自己ノ船舶ノ蒙ル損害ヲ負擔センコトヲ申來ルノミナラバ、同會社ハ書ヲサリスベリト候ニ送リ、其大意ヲ余ヲ經テ日本政府ニ致サンコトヲ乞ヘリ。其要ニ曰ク、本會社ノ支配人等ハ哀ムベキ出來事ヨリ生ジタル本件ノ友誼的落着ヲ告ゲルコトヲ誠實ノ満足ヲ表シ、右哀ムベキ出來事ニ對シテハ最モ深く痛悼ノ意ヲ表ス。而シテ同會社船ノ士官ヲ批難セズ、千島艦ノ士官ニ至リテハ尙ホ一層批難セズ云々ト、尋テ同月十四日在橫濱彼阿會社代理人ゼーリツケットハ海軍大臣ニ面會ヲ遂ゲ、同月十九日原告代人ワルフ



オールド及被告代理人ラウダー同伴在横濱英國領事裁判所ニ出頭シ同裁判所ニ於テ言渡ヲ受ケ其言渡シニ曰ク、「原告代理人ノ請求アリタルト被告ガ本訴一切ノ損害賠償及訴訟費用（被告ヨリ原告ニ支拂フベキ旨判決サレタル訴訟入費ヲ除キ）完済トシテ英貨一萬磅ヲ原告ニ支拂フコトニ依リ、本法廷ハ原被兩告ノ協議ニ依リ向後本件一切ノ訴訟手續ヲ停止ス。但シ前述ノ已ニ判決アリタル訴訟入費支拂ニ關シ必要ナル手續ヲ取ルハ此限ニアラズ」ト。尋テ右英貨一萬磅即チ當時換算相場ニテ金九萬九百九十五圓廿六錢ノ受渡シヲ了シ、訴訟入費ハ英國樞密院及上海裁判所ノ費額今精算中ナルヲ以テ追テ精算次第諸支拂ヲ受クルコトナシ、茲ニ本件全ク落着ヲ遂ゲタリ。

以上本件示談ニ關スル事實ノ來歴ヲ述ベタルヲ以テ進ンデ前記ノ如ク示談ヲナセル理由ヲ左ニ述ベン。

### 示談ヲナセル理由

千八百六十二年ノ英國ノ「商船條令第五十四條ハ船舶所有主ハ其船舶ノ不當ナル航海ニ依リ他ノ船舶、商品其他ノ物件ニ損害ヲ蒙ラシメタルトキハ、自己ノ船舶排水噸數ノ各一噸ニ對シ英貨八磅以上ノ損害賠償ノ責ニ任セザルモノトス云々ノ規定ヲナセリ。又生命喪失ノ場合ニアリテハ物件ノ損害及生命喪失ニ對シ合計右各一噸ニ對シ英貨十五磅ニ超過セザル責ニ任ズルモノトナスノ規定ヲナセリ。我政府ノ請求スル所ハ軍艦千島及在艦ノ兵器大砲彈藥ニ止マリ、艦員生命喪失ニ關シテハ該遺族ヨリ請求シ、政府ノ請求ト附帶セザルヲ以テ右英國法律ニ依ルモノトスルトキハ「ラベンナ」號排水噸數ノ各一噸ニ對シ、英貨八磅以上ノ請求ヲ爲シ能ハズ即チ「ラベンナ」號排水噸數三千二百五十六噸ニ各一噸ノ責任額八磅ヲ乘シ總額二萬六千〇四十八磅ナリトス。之ヲ「ラベンナ號」ノ負擔シ得ル最大賠償額ナリトス。

然リ而シテ英國樞密院ハ反訴ノ件ニ對シ與ヘタル判決文ノ末項ヨリ數ヘ第五項中ニ論ジテ曰ク、若シ本訴審理ノ結果原被兩告ノ艦船共ニ過失アリト決スルニ於テハ幾多困難ノ問題生ズルナルベシ。第一原告ハ損害半額以上ヲ請求スルヲ得ズ。且ツ若シ該法廷ニ於テ裁判シ得ル反訴ノ提起セラレンニハ双方ノ損害ヲ檢定シ、各ニ其半額ヲ負擔セザルベカラズト、又末項ヨリ數ヘ第三項ヲ以テ論ジテ曰ク、英國海事裁判所ニ於テ原被双方ノ船舶過失アリト決スルモ、原告ガ外國人ノ故ヲ以テ原告ヲシテ被告ノ蒙レル損害ノ半額ヲ支拂ハシムルコトヲ執行シ能ハザル場合ニアリテハ、法廷ハ原告ガ右被告ノ損害半額ノ賠償金ヲ被告ニ支拂ヒ終ル迄ハ被告ヲシテ原告ノ蒙レル損害ノ賠償金半額ヲ原告ニ支拂フコトヲ停止セシムルヲ例トセリ（「ゼセリンガバタム」ノ件參照）ト、又末項ヨリ數ヘ其第二項ニ於テ論ジテ曰ク、本件ニ於テ若シ原被兩告ノ艦船共ニ過失アリト假定シ、當該法廷ハ前述二様ノ方法中何レヲ取ルヤヲ今本院ニ於テ決スルハ全ク早計ニ屬スルヲ以テ茲ニ論及セズ



ト、又双方ニ過失アリト決スルトキハ訴訟入費ハ双方ノ負擔タルコトヲ記憶セザルベカラズ。  
 今ニ及ンデ以上法律ノ適用ヲ詳論シ、事實上彼我ノ過失有無如何ヲ精査スルノ必要ナキヲ以テ、  
 茲ニ之レガ決論ヲ引出セズト雖ドモ我政府ガ彼レノ申込ヲ入レテ示談ヲ爲スコトニ決シ、彼ヨリ訴  
 訟入費ノ外ニ英貨一萬磅ノ支拂ヲ受ケ茲ニ軍艦千島訴訟事件ノ落着ヲ告ゲタルハ法律ノ眼ヲ以テス  
 ルモ甚ダ遺憾ナキガ如シ。

符箋

附箋

本邦法律ニハ船舶衝突ノ際双方過失アルトキ該損害分擔ノ法ヲ規定スルハ商法第九  
 百四十二條(明治二十三年四月法律第三十二號)ヲ以テ規定ス。曰ク「衝突破裂其  
 他ノ事由ニヨリテ船舶及積荷ニ生ジタル損害ニ付テハ自己ノ過失ニ因リ其損害ヲ惹  
 起シタル者責任ヲ負フ。若シ其災害ガ事變又ハ當事者双方ノ過失ニ因リテ生ジタル  
 トキハ、各當事者ハ己レニ受ケタル損害ヲ負擔ス。然レドモ當事者双方ノ過失相均  
 シカラザルトキ、又ハ其災害ノ事由ヲ明カニ檢知スルコトヲ得ザルトキハ損害ノ割  
 賦ハ公平ナル酌量ニ從ヒテ之ヲ爲ス」トアリ。然レバ過失双方ニアリテ該過失ノ多  
 寡ヲ決シ得ザルトキハ双方自己ノ損害ヲ自己ニ負擔シ、毫厘モ對手ヨリ請求シ得ザ  
 ルナリ。而シテ此ノ如キ場合ニハ大概示談ヲ遂グルヲ以テ其判決例極メテ少ナク果  
 シテ之レアリヤ否ヤ、今調査中ナルヲ以テ實例ニ付テ茲ニ之ヲ論究スルノ便ヲ得ザ

ルモ畢竟此點ヲ議院等ニ明言シテ彼阿會社ノ知ル所トナルトキハ惡感情ヲ惹キ起ス  
 ノ恐アルヲ以テ篇中ニ記載セザリシナリ。然リト雖ドモ議院ヲシテ此點ヲ了知セシ  
 ムルニ於テハ我政府訴訟費用ノ外ニ示談金一萬磅ヲ得テ落着ヲ告ゲタルコトノ上成  
 功ナリシコト益々ニ明瞭ナルヲ得ベシ。

且ツ夫レ公務上ノ資格ヲ以テセズト雖ドモ、英國外務次官タル者彼阿會社ノ申請ヲ爲シテ我政府  
 ニ本件ノ示談ヲ申込ムニ當リ、我政府ハ我權利ト名義上ニ於テ毀損スル所ナキ以上ハ可及丈夫誼的  
 精神ヲ以テ示談ノ申込ミヲ承諾スルニ於テ吝ナラザルベシ、今ヤ軍備擴張ノ必要ハ國防ノ趨勢ニ驅  
 ラレテ緩漫ヲ許サズ、此際些々タル權利爭ヒノ爲メニ數年ニ互ル國家訴訟ヲ提起シテ飽ク迄之ヲ繼  
 續セントスルガ如キハ大小輕重ヲ識別セザルノ所爲ナリト云ハザルベカラズ。加之彼阿會社既ニ反  
 訴ノ判決ニ於テ敗訴シ勢ヒ挫折シテ示談ヲ我ニ申込み來ルニ當リ、徹底我權利ヲ主張シテ之ヲ拒絶  
 スルガ如キハ堂々タル一國政府ガ一私立會社ニ對スル方ニアラザルベシ。彼阿會社既ニ訴訟費用ヲ  
 負擔シ又自己ノ蒙ムレル損害賠償ヲ我ニ對シ請求セズシテ更ニ英貨一萬磅即チ我九萬九百九十五圓  
 二十六錢ヲ我政府ニ支拂フニ於テハ名義自ラ明カナルヲ得テ又遺憾ナシ。軍艦千島ノ船長及其乘員  
 ノ名譽ヲ傷ケザリシノミナラズ、彼ノ不幸ノ死ヲ遂ゲタル者モ亦以テ地下ニ瞑スベシ。



以上ノ理由ニ依リ我政府ハ彼阿會社ヨリ訴訟費用ノ外ニ英貨一萬磅即チ我九萬九百九十五圓二十六錢ノ受渡シヲ了シテ茲ニ本件ノ落着ヲ遂グルニ至リタルナリ。

## 日本政府對彼阿會社

拜呈小生事倫敦ヨリ左ノ意味ノ電報ヲ落手致候之ヲ閣下ニ上申スルハ誠ニ悅バシキ次第ニ有之候。

一、上訴ハ日本政府ノ勝訴ニ歸セリ。上海法廷ノ判決ハ破毀セラレテ一切ノ訴訟費用ハ被上訴人ノ負擔スベキコトナレリ。其理由トスル所ハ日本原告ニ對シテハ在日本英國法廷ニ於テ何等ノ請求ヲモ爲スヲ得ズト云フニアリ。

二、果シテ此ノ如シトセバ樞密院ハ最早上訴ニ關スル他ノ論點ヲ判定スルノ要ナシ、之ニ關スル上海法廷ノ判決ハ何等ノ効果ヲモ有セズ、決シテ先例ト爲ルベキモノニアラザルナリ。

右判決ノ下ルハ誠ニ永引キ候得共待甲斐アリシモノニシテ結構ニ候。兼テ本件ニ付テ上申仕候卑見ハ倫敦代言人ノ意見ニ合セシノミナラズ、又樞密諸卿ノ贊同ヲ得タルハ小生ニ取リテ頗ル本懐ノ至ニ候。

貴政府ハ此度ハ首尾能ク御戰捷被遊諸國等シク其利益ヲ享受仕候。日本ハ戰爭ニ勇鍊ナルト共ニ亦能ク平和ノ事ヲ知レルヲ天下ニ發表セリ。

千八百九十五年七月四日東京ニテ



閣下ノ忠僕 カークウッド  
海軍大臣伯爵 西郷 閣下

(千島訴訟事務囑託 松波仁一郎譯)

「カークウッド」ノ意見ハ結局左ノ如シ。

一、金額十萬弗請求スベシ。

ピーラー會社ハ一萬磅ヲ支拂フコトヲ申出ヅルト雖ドモ、本訴ハ元メキシコ弗ニテ請求セルモノニシテ、右一萬磅ハ現今ノ換算相場ニテハ九萬二三千弗トナリ端數ナルヲ以テ始メヨリ端數ニ非ザル十萬弗ヲ請求スルヲ可トス。

二、反訴ノ訴訟入費ヲ請求スルコト

一政府ガ一會社ヲ相手取り訴訟ヲ提起セル時勝訴ノ場合ニ於テ訴訟入費ヲ免除スルコトアリ、左レドモ之レ該政府若シ敗訴セルトキ亦訴訟入費ヲ支拂ハザルモノトス。畢竟政府ヲ政府トシテ法廷ニ於テ扱ハル場合ニ限ル、軍艦千島ノ件ニ於テモ始メピーラー會社ニ申込デ曰ク、若シ帝國政府ヲ政府トシテ扱ヒ勝敗ニ拘ハラズ訴訟入費ヲ受ケモセズ支拂モセズト爲スコトニ同意セザルヤト申込メルニ、彼ハ之ヲ拒絕セリ。故ニ訴訟入費ハ今ニ及ンデ免除スル

コト能ハズ。

三、本訴ヲ帝國政府ノ勝訴ト爲シ多少ニ拘ハラズ本訴訟入費ヲピーラー會社ヨリ政府ニ支拂フコトヲ請求スベシ。

本訴ヲ政府ノ勝訴ト爲サズシテ單ニ示談ノ結果ヨリ解訟スルモノトスルトキハ各義ニ於テ遂ニ本訴ニ於テハ軍艦千島ノ果シテ過失無カリシヤ否ヤヲ明言セズ訴訟入費ヲ各自ニ於テ分擔スルヲ以テ名義上極メテ政府ノ不利益ナリ。政府ハ金額ニ關セズ名義ニ於テノ勝訴ヲ希望スルナルベシ。而シテピーラー會社ハ名義ニ於テハ始メヨリ示談ノ申込以後何等ノ注文ナク單ニ金額ノ多寡ニ付テノミ申來リ居ルヲ以テ今本訴ニ於テ名義上ノミノ勝利ヲ帝國政府ニ得セシムルモ金額ニ於テハ極メテ小額ノ差違ナルヲ以テ必ズ甚シキ異議無カルベシト信ズ。

四、第一項ノ金額十萬弗ハ到底彼ニ於テ應ゼザルトキハ一萬磅ニテモ可ナラン左レドモ第二第三項ハ請求セラルベシ。

大臣閣下

カークウッド氏ノ意見ハ別紙記載ノ如クナレドモ、右意見第一項ノ如キハ氏自身モ必ズシモ主張スベカラザルコトヲ第四項ニ於テ認メ、又其第三項ノ如キハ一個人ノ場合ニ於テ喧嘩ノ結局謝罪



狀ヲ對手ニ書セシムルガ如キモノニシテ、彼ヲシテ窮セシメ彼ヲシテ感情ヲ惡カラシムル割合ニ我ニ利益ナキモノナリ。畢竟世人ニ對シ示談ノ結果トシテ彼阿會社若干ノ金額ヲ我ニ支拂ヒ、我訴訟ヲ解除セリト云ヘバ必ずシモ是非曲直ヲ法廷ノ記録ニ名義上記入シ、小額ノ(名ノミノ)訴訟入費ヲ支拂ハシムルヲ要セザルナリ。故ニ余ノ意見ニテハ去ル三十日閣下ニ上申シ置ケルガ如ク、左ノ二條件ニテ示談ヲナスベキモノト思考ス。

第一、彼阿會社ハ彼レガ申出タル如ク一萬磅ヲ我政府ニ支拂フ事。

第二、上海及英國樞密院ニ費シタル我訴訟入費ヲ政府ニ支拂フコト。

本項ハ當然我要求スルヲ得、彼モ亦異議ナカルベカラズ今回ノ示談ハ本訴ノ示談ニシテ既ニ明カニ勝敗ノ決シタル反訴ニ就テノ示談ニアラザレバナリ。カークウツド岡村氏ノ意見ニ依ルモ亦反訴ノ訴訟入費ハ當然請求スベキモノトナス。

右卑見不取敢復命トシテカークウツド意見摘要呈出ト共ニ御參考迄ニ及上申候也。

尙ホカークウツド意見書詳細ハ明日譯文可供御覽候也。

明治二十八年九月一日

主 理 清 水 市 太 郎

海軍大臣侯爵 西 郷 從 道 殿

法學博士 岡村輝彦氏書翰

(明治廿七年三月十四日付倫敦發)

謹啓

爾來愈御多祥御奉務被爲在候段奉敬賀候。扱本件之模様先便ヲ以テ不取敢御報申上候へ共詳細ノ事情等左ニ開陳仕候。

一、第一ニ代書人ヨリ問ハレタルハ彼代言料其他ノ費用ニ有之、嘉氏ヨリハ五百磅ト申越タル由ナルガ是ハ論外ニ僅少ナレドモ、彼等ノ言フ所ハ八千磅ヨリ一萬磅ニ達スル用意ナケレバ迎モ名代言人ヲ得ルコト能ハズト、而シテ曩ニ嘉氏ニ其事ヲ書狀ニテ申遣シアレバ、此返事ヲ得ルニアラザレバ全ク事件ヲ代言人ノ手ニ渡ス能ハズ。若シ之ヲ渡セバ代書人自ラ代言人ニ對シ謝金ノ責任ヲ負ハザル可ラズト。右ノ如ク非常ニ費用ノ懸ルモ今更手ヲ引クコトハ出來難カルベク、實ニ本件ハ當府ノ新聞ニモ顯ハレ大事件ナルハ皆人ノ承知スル所ナレバ、非常ナル謝金ヲ請求セラルルモ止ヲ得ザル次第ト言フノ外ナカルベク、代書人ハ彼ノ「ペーリング」海峽事件後ノ事件ト申居候。而シテ小生ハ代言人雇入並ニ謝金等ノ事ハ委任ヲ受ケ居ラズ、故ニ此主意ヲ以テ答辯致候ニ付、益々本國ヨリノ返答必要ト相成候。且ツ英人ハ金ノ



權力ヲ有セザル人ニハ餘リカヲ與ヘズ、小生ノ位置モ少シク此場合ニ立至リ居リ残念ニ御座候。殊ニ嘉氏ヨリ私信モアリシナランガ、幾分カ小生ノ言ヲ取ラザル模様モ見ヘ候間、此上ノ様子ニテハ或ハ自ら代言人ノ一人トナル請求ヲ爲スベキ場合ニ立至リ可申モ計リ難ク、然シ只今ハ著シク反對モ見ヘ不申候間見合セ居リ申候。

二、前項ノ通り未ダ全ク事件ヲ代言人ノ手ニ渡シ不申然シ其進行ニハ不都合無之候間御安心被下度候。

三、代言人ハ既ニ Solicitor general sir John Regby, Cohen Q.C. (前便ニ Cowen ト記セルハ誤ナリ) 及 T. A. Satow ノ二人ヲ雇ヒ入有之此外ニ今一人 Cautley ト云フ代言人ヲ雇入ル、由申居候。右ノ内「コーエン」ハ國際法ニ就テハ當國第一流ノ代言人ニ有之由、本日小生ノ舊師「アトキンス」ト申ス代言人ニ面會問合セ候處、同人モ「コーエン」ヲ賞讃致シ居リ「リグビー」ハ飾リナレバ此人一人ニテ澤山ナリト斷言致シ居ラレ申候。「コーエン」ハ非常ノ金満家ナレバ通例ハ事件ヲ引受ザル由、然ルニ本件ヲ引受タルハ全ク大事件ニテ同氏ノ名譽トナリ且ツ國際法ノ研究トナルガ故ナリトノ事ニ有之候。

次ニ檢事長「リクビー」氏ナリ、同氏ハ老法律家ニテ裁判所ニ信用アル人ナリ、殊ニ熱心ニ事件ヲ取扱フ人ナリトノ評判アリ。去ル土曜日樞密院ニ於テ我代言人引受ノ公判アリシニ付

見聞ニ行キタル所、右「リグビー」氏ハ反對ノ代言人ナリシガ、當時裁判官ハ全ク反對ノ意見ニテ頻リニ「リグビー」氏ヲ遣リ込タルモ容易ニ服セズ、熱心ニ辯論セシ様子ハ評判ト同様ニ見受ケ申候。斯ノ如キ人ハ我事件ニハ必要ト考ヘラル。兎ニ角代言人雇入ニ付テハ最上ノ手續ヲ盡シタルモノト見テ然ルベク、對手人ノ代言人「ウエブストル」ハ最モ評判高キ人ニテ、何人モ其雇入ヲ忠告致シ吳候ヘ共、是ハ始メヨリ先方ノ雇代言人ナレバ致シ方ナシ。只「ラツセル」ヲ雇入ザルハ實ニ遺憾ニ堪ヘズ。同人雇入ノコトハ曩ニ代言人ヨリ公使館迄申上タル由ナレドモ、例ノ日本流ニテ我が知ル所ニアラズトハネ付タル様子ナリ、僅カニ二ギニーヲ投ズレバ先方ニ取ラレル事ヲ防ギ得タルモノヲト人々申シ居候返スノモ残念ニ御座候。

「サトウ」ハ日本ノ事情ヲ承知シ居リ、且ツ多少熱心ナルガ故ニ雇入タルモノニテ、下働キヲ爲スニハ斯ノ如キ人物ノ必要ナルコト勿論ナレバ其モ其儘ニテ宜シカラン。

「コートレー」ナル者如何ナル人物カ未ダ承知セズ、好ク探索ノ上雇入ノコトニ取極ムル積リニ御座候。

四、代書人ニ度々面會當方ノ意見陳述候處大ニ反對ノ所モアリ容易ニ折レ合付カズ、何レ「コーエン」ノ意見ヲ聞キ取極ムル積リニ有之候。英國ノ代言人代書人醫師等彼ノ所謂 Profession-



ral men ト稱スル輩ハ一目シテ事ヲ決スルヲ好シトスル風習アリテ、己ノ學術經驗モ知ラズ、只其外形ヲ示スノミ實ニ今回ノ代書人ト協議スルニ於テモ小生ノ言ヲ充分ニ聞カズ、何ニモカモ百モ承知セル如ク速斷ヲ爲スニハ困却致候。然シ追々ト議論ノ末ニハ吞ミ込マシムル決心ナレバ御安心被下度候。

五、公使青木氏ニハ度々面會セリ。高貴ナル判官ト懇意ニナラント依頼セシモ、赴任日淺ク知己ナシトテ斷ハラレタリ。然シ近日代言人等ヲ饗應スルコト及ビ公判ノ節「ベルリン」ヨリ來リ聽聞セラルル事ハ是非依頼スル積リナリ、此點ニ付テハ河瀬公使ノ歸朝セラレシハ遺憾ナリ。前領事大越氏ハ千島事件ニハ非常ニ熱心ナリシト、屢々「ビーラー」會社關係ノ人ニ付キ談話セシ様子ナルガ、「ビーラー」モ最初ハ本件ガ日本人ノ感覺ヲ害シ爲メニ同社ノ利益ヲ讓スナラント非常ニ心配セシ由、當時ナレバ隨分示談モ遣リ様ニテ行届キタラントノ事ナリ。兎ニ角大越領事モ亦上海ニ轉任セシヲ以テ、敵ノ事情ヲ知ル能ハズ、殊ニ同氏ハ小生ノ舊知己ナレバ萬事ニ付都合宜シカリシナラント残念ニ堪ヘズ。實ニ「ラツセル」ハ先方ニ取ラレ又當地ノ事情ヲ了知セル公使領事皆去レリ不幸モ亦甚シト云ハザル可ラズ。

覺悟ノ誤乎

六、日本ヨリ持參セシ證據ハ金ガ懸リテモ成ルベク裁判所へ呈出スル。確固ニ有之、代書人ハ大抵ハ不必要ニテ受理セラレ間敷クトノ意見ナレドモ、小生ハ毀却セラルル迄モ其呈出ヲ請求

スル決心ニ有之兎ニ角是ニ付テハ「コーエン」氏ノ意見ヲ聞ク積リニ有之候。

後便ニテ御送付ノ證據書類ニ小生謝金増額御指令正ニ領收仕候。

七、御承知ノ通り日本ニ於テハ只證據ヲ集メタルニ過ギズ、之ヲ整頓スルノ暇ナク出立セシヲ以テ、着後其整頓ニ着手シ翻譯ヲ爲シ意見ヲ記シ書類ヲ取調ブル等日夜非常ニ繁忙ヲ極メ居リ候。

然シ大略ハ整頓代書人ニ引渡シ申候間御休神被成下度候。

八、本件開廷ハ前便ニ申上候如ク先ヅ六月ナラントノ事ニ有之、若シ證人ニデモ召喚スルトキハ殆ント一ケ年ハ相懸ルベク實ニ豫想外ニテ閉口仕候。

九、當地銀貨不相變下落閉口仕候。其上ニ一ケ年モ懸ルトキハ迎モ行立兼候間何レ増金ノ事ヲ申立ル場合ニ立至リ可申其節ハ偏ニ御盡力奉希望候。

右今日迄ノ事情閣下迄開陳仕候間

大臣閣下可然御執奏奉願上候且ツ伊藤總理大臣井上内務大臣兩閣下モ大ニ御心配被成候間御序二本  
文事情御通報奉願上候。

頓首再拜

廿七年三月十四日

岡村輝彦

伊藤次官閣下



追伸

「ピーラー」會社ニ於テハ郵便會社ガ今回「ボンベイ」ニ航路ヲ開キタルニハ非常ニ苦心シ居ル由、故ニ政府ガ郵船會社ヲ補助スルノ模様ヲ見スルニ於テハ或ハ本件示談ニナルベキカトノ説アリ、是ハ我が領事館書記生等ノ説ナレバ敢テ信ヲ置クニ足ラザレドモ御參考迄ニ申上候。

次ニ今回御増額ノ金二千圓小生ノ代理トシテ實父岡村義昌小生ノ委任狀ヲ持參受取ニ參リ候節ハ御渡シ被下度候。

三伸

青木公使ノ説ニ本件ニ付テハ大陸（獨逸ノコトナラン）ヨリ高名ナル學者ヲ雇入レ來リ其意見ヲ聞クベシト、英國裁判所ハ迎モ斯ル學說ナドニハ信ヲ置カザルハ勿論ニテ、何ノ役ニモ立タザルコト明カナレバ無益ニ金ヲ遣フコトハ止メタル方ト思考セシヲ以テ其儘ニ致置候。

## 千島艦事件情況

在倫敦 岡村輝彦氏書翰

明治廿七年三月廿四日

一、前便ヲ以テ情況ヲ報告セシ後モ度々代書人面會ヲ爲シ説明論談シタル末、漸ク當方ノ希望スル處ヲ會得セシムルヲ得タリ。依テ代書人ニ於テ書類ヲ整頓シ、之ヲ代言人ニ渡ス運ビニマデ到着セシモ、彼ノ「イースタル」休暇昨二十三日ヨリ始マリタルヲ以テ、來月初旬ナラデハ代言人ニ面會スル能ハズ、其節ハ小生モ面會當方ノ希望ヲ陳述スル筈ナリ。

二、當方雇代言人ノ「サトウ」(F. A. Satow) ニハ漸ク去ル二十日ニ面會ヲ得タリ。同人ハ曩ニ「コーエン」「ビゴット」兩人ト共ニ訴狀ノ草案ヲ作りタルヲ以テ、大略事件ノ模様ヲ承知スルノミナラズ、日本ノ事情モ承知シ居レバ、當方ノ説明スル所モ速ニ了解スルヲ以テ大ニ便利ナリ。右訴狀草案ハ未ダ小生ノ着セザル前ニ作りタルモノナルヲ以テ、迎モ其儘ニハ提出スルヲ得ズ、因テ小生ノ意見ヲ認メ省略スベキ所竝ニ追加スベキ點ヲ書面ヲ以テ代書人ニ渡シタリ。是等モ亦「サトウ」ニハ直接ニ面會説明スルヲ得タレバ好都合ナリシ。



三、彼ノ領海問題ノ點ニ付テハ我勝利ナルベキハ何人モ豫想スル處ナレドモ、裁判所ニ於テ此問題ヲ避ケテ我ニ不利ナル裁判ヲ與ヘザルカト「サトウ」モ心配セリ。是レ小生ニ於テモ大ニ心配スル所ナリ。

四、今般千島事件ヲ主トシテ擔任セルハ「コーエン」氏ナリ。氏ハ隨分當地ニ於テ名望高キ人ニテ、「インナル、テムプル」法院ノ會計役「カムブリッチ」大學ノ雇ヒ付ケ代理人ヲ爲シ居リ、辯舌ハ格別ナラザルモ學識經驗ニ付テ信用アル人ノ由ナレバ、樞密院ニ使用スベキ代理人ニ最モ適當ノ人ナリ。元來樞密院ニ於テハ日本ノ如ク陪審官ヲ用ヒズ、裁判官自ラ法律ト事實トヲ審理判決スルニアレバ、代言人得意ノ辯舌ハ格別用ヲ爲サズ、却テ其辯舌ガ裁判官ノ感覺ヲ害スルコトアリト云フ。先方ノ代言人ナル有名ノ「ラツセル」ハ辯者ニテ、陪審官アル普通裁判所ニハ最モ適當ナレドモ、樞密院ニ於テハ左程恐ルベキニアラズト。尤モ他ノ代言人ナル「ウエブストル」ハ「コーエン」同様樞密院ニハ最モ適當ナル人ノヨシ、故ニ此度ノ戰爭ハ「コーエン」對「ウエブストル」ト云フ取組トナラン。然シ茲ニ最モ奇ナル事アリ、「ラツセル」「ウエブストル」兩人ハ何レモ彼ノ「ベーリング」海峽事件ニ於テ英國政府ノ代言人トシテ出頭シタル人ナリ。該事件審問中合衆國政府ノ代言人ハ我ガ下ノ關事件ヲ例證トシテ下ノ關海峽ハ數強國ガ兵力ヲ以テ之ヲ開カシメ、既ニ今日トナリテハ萬國ノ公道トナリタリト丁度「ハンネン」ガ上海ニ於テ主張セシ

如クニ主張シタリシニ、「ウエブストル」ト同行ノ「ピゴット」ハ多年日本ニ使用セラレ、其事情ニ委シキ人ナルガ、同人ヨリ承知スル所ニテハ下ノ關海峽ハ各國ガ兵力ニ依テ開キタルニアラズシテ、全ク日本トノ條約ニ依テ開通シタルモノナリト答辯シタリキ。故ニ此度ハ「ウエブストル」ニ於テ巴里ニテ主張セル所ト反對ノ議論ヲ主張セザルヲ得ズ。是ニハ一番閉口スルナラントノ事ナリ。然シ代言人ナレバ少シモ頓着スル所ナカルベキ乎。

五、費用ノ増加スル事ニ付早速電報ニテ嘉氏ノ返事ヲ促ス積リノ處、已ニ代書人ヨリ嘉氏ニ書面ヲ遣シアリ、此書面本月三十日頃日本ニ達スル筈ナレバ夫レヨリ以前ニ電報ヲ發スルモ其意味通ゼズ、爲メニ無益ノ往復ヲ爲スコトアルベク、殊ニ事件ヲ樞密院ニ提出スルハ來月初旬ナラデハ逆モ間ニ合ハザレバ、兎ニ角今月末マデ電報ヲ見合テハ如何トノ代書人ノ注意アリシヲ以テ之ニ從ヒ、本月末カ來月初メニ日本ヨリノ返信ナキトキ當方ヨリ發信スルコトニ決シタリ。

六、今般雇入ノ代言人ニ對シ我公使ニ於テ晩食ノ饗應ヲ爲シ呉レラルレバ、彼等ニ満足ヲ與ヘテ我が爲メニ一層盡力シ、且ツ小生ノ陳ブル所モ好ク通ズルナラント昨日青木公使ニ懇願セシ處、公使ニ於テハ昨今英政府ノ日本ニ對スル感覺面白カラズ、故ニ斯ル事爲シテハ如何、兎ニ角考へ見ントノ返答ナリ。小生ノ考フル所ニテハ少シモ外交ニ關スル事ニアラズ、現ニ内閣ニ關係アル「ソリシトルゼネラル」ハ我ノ雇代言人ニテ、對手人ハ一ノ商社ナリ、公使ガ政府ヲ代表シテ訴訟

四月十二日  
倫敦發ノ電  
報ヲ以テ岡  
村氏ヨリ  
一金ノ件カ  
ラシクウツド  
ヲ經テ代書  
人ニ答アリ  
タシトアリ  
リ督促アリ



ヲ提記スルコトサヘアル次第ナレバ、毫モ斯ル無キ筈ナリト思ハル。青木公使果シテ承諾セラル、ヤ否ヤ其後ノ返答ヲ希望シ居レリ。

七、出立ノ際金子氏ヨリ注意アリシ佛國萬國公法會ノ事ハ、同國ニ在學ノ寺尾亨ニ通信セシ所、已ニ金子氏ヨリ寺尾ニ申送りアリテ我領海問題ヲ公法會ニ提出スルコトハ出來得ベキモ、同會ハ現在問題トナリ居ルコトハ成ルベク避クルノミナラズ、若シ我が敗訴トナリタルトキハ外交問題ト變ズル場合ニ立至ルベク、其時コソ一方ニ於テ同會ノ意見ヲ聞クハ頗ル必要トナルベク、夫迄ハ見合シテハ如何ト已ニ金子氏ハ申遣シ、若シ提出スル積リナレバ電報ニテ通信アリ度旨申遣シタルニ、未ダ何等ノ返答ナク、或ハ同意ナラントノ回答ヲ得タリ。小生モ此說ニ同意ニテ、今日彼是學說ヲ聞キ之ヲ公ケニスルハ面白カラズ、何ントナレバ同會ノ說ニシテ英國法官ノ感覺ヲ惹キ起ス勢力アリトセバ其感覺ハ反對ニ生ズベク又斯ル勢力ナケレバ（英國ニテハ斯ル勢力ナキハ無論ト思ハル）何ノ役ニモ立タザルナリ。

茲ニ同會員ニテ英國代言人「バークレ」ト云フ者アリ、金子氏ノ友人ノ由ナルガ、已ニ同氏ニ於テ私ニ我が領海問題ニ關スル意見ヲ草シ吳レタル由ニテ、金子氏ニモ送付セリト云フ。小生ヘモ寺尾氏ヨリ送り越シタリ。同氏ハ頗リニ今回我代言人ノ一人ニ加ハル事ヲ希望スル由ナリ。然ルニ同氏ハ如何ナル人ナルヤ未ダ其性質ヲ知ラザルノミナラズ、永ク佛國ニ在任スル人ナレバ、當地ニ於テハ格別名ヲ知ラレタル人ニハアザラナランカ。當地ハ如何ナル學者ニテモ更ニ勢力ナク、只實地ニ經驗アル老代言人ニテ人ニ知ラレタルヲ最良トスル慣ヒナレバ、「バークレ」氏ノ如キ人ヲ使用スルモ果シテ如何ナル効力アルヤ未ダ是非ヲ辯ゼズ。因テ代書人ニモ相談ノ上ニテ品ニ寄り電報ニテ嘉氏ニテ問合セルコトニ決シ置ケリ。

右ノ千島事件其後ノ事情及御通報候也

明治廿七年廿四日

在英國 岡村 輝彦

海軍大臣 兩閣 下  
海軍次官



## 千島艦訴訟事件審査報告

小官等十一月十五日千島艦衝突訴訟審査委員ノ命ヲ蒙リ、同十六日以來海軍省内ニ於テ數回ノ委員會ヲ開キ、衝突以來ノ書類ヲ披閱シ茲ニ調査ノ結果ヲ略述シテ報告セントス。

本訴訟ノ第一審ハ在橫濱英國領事裁判所ニ於テ之ヲ開キ、原告日本政府ハ被告彼阿會社ニ對シ千島艦ノ沈没ヨリ生ジタル損害賠償及其訴訟入費トシテ合計墨銀八十五萬弗ヲ請求シタリ。然ルニ被告彼阿會社ハ原告日本政府ニ對シ其所有船「ラベンナ」號ト千島艦船トノ衝突ハ千島艦航海者ノ懈怠ニ基キタルノ故ヲ以テ十萬弗ノ損害ヲ回復スル爲メ、第一訴訟規則第五十五條ニ依リ反訴ヲ提起スルノ許可アランコト、第二反訴ハ本訴ト同時ニ之ヲ審判セラルルコト、第三反訴ノ裁判ニ服從セシムル爲メ原告ヲシテ保證金ヲ提出セシムルコトヲ請求シタリ。

是ニ於テ原告日本政府ハ第一條約ニ依レバ反訴ニ服從スルノ義務ナキガ故ニ、獨リ本訴ノ審判ノミヲ受クルノ權利ヲ有シ、第二原告ハ主權者ナルヲ以テ皇帝ハ惡事ヲ爲サズトノ主義ニ基キ不可侵ノ特權ヲ有シ、第三假令ヒ領事裁判所ニ於テ主權ノ特典ヲ認メザルモ衝突ノ場合ハ日本ノ領海ナルヲ以テ日本ノ法律ヲ適用スベキモノナリトノ理由ヲ以テ此ノ反訴ニ抗辯シタリ。

而シテ領事裁判所ニ於テハ原告日本政府即チ□□□□ト雖モ一たび該裁判所ニ起訴セラレタル以上ハ單ニ外國君主ガ英國裁判所ニ訴訟ヲ提起シタル場合ト同ジク一箇ノ訴訟人ト看做シ、□□□ノ大權ヲ認ムルコト能ハズ、然レドモ私犯行爲ニ對スル賠償ノ責任ハ其私犯ノ發生シタル場所ノ法律ニ依テ定ムベキモノナルニ因リ、本訴ニ於テ其責任ノ如何ヲ決定セント欲セバ衝突地ノ法律ニ依ラザルヲ得ザルナリ。然ルニ千島艦衝突ノ場所ハ萬國公法ノ定義ニ依レバ日本ノ領海ナルガ故ニ、日本ノ法律ヲ適用スベキコト勿論ナリトス。而シテ日本ノ法律ニ依レバ□□□□ハ臣下ノ懈怠ニ對シ責任ヲ有セザルニ因リ、本件ノ反訴ハ許可スベキモノニ非ラズト判決シタリ。

是ニ於テ被告彼阿會社ハ此ノ判決ヲ不當トシテ在上海英國上等裁判所ニ控訴シタルニ、同裁判所ハ橫濱領事裁判所ノ判決ヲ破毀シ左ノ如ク裁判シタリ。

第一、千島艦衝突ノ場所ハ萬國ノ公開航路ナルヲ以テ之ヲ公海ノ一部ト見做シ、日本法律ヲ適用セズ、海上法ヲ適用スベキ場所ナリ。

然ルニ海上法ニ據レバ船舶ノ所有者ハ船長以下ノ私犯行爲ニ對シ責任ヲ有シ、又同法ニ於テハ反訴ヲ許可スルノ制規ナルガ故ニ、在橫濱領事裁判所ニ於テ反訴ノ許可ヲ却下シタルハ不當ナリト判決シタリ。

第二、訴訟規則第五十五條ニ規定シタル反訴ニ關シテハ日英條約中何等ノ規定ナキノミナラズ、



其第六條ニハ訴訟事件ハ公平ニ處斷スベシト記載セルニ依リ、若シ本訴ト共ニ反訴ヲ受理審判セザルトキハ條約ニ所謂公平ノ裁判ヲ下スコト能ハズ、故ニ訴訟規則第五十五條ニ依リ反訴ヲ許可シタルハ條約ノ規定ニ違反スルモノニアラザルナリト判決シタリ。

第三、上海上等裁判所ハ本訴ニ關シ反訴ヲ許可スルノ權利ヲ有スルガ故ニ、反訴ニ隨伴シタル保證金ノ提出ヲ命令スルノ權ハ無論有スルモノナリト判決シタリ。

以上ハ第一審及第二審ノ判決ノ要領ナリ、而シテ小官等ハ上海上等裁判所ノ判決ニ對シ更ニ進ンデ英國樞密院ニ上訴スベキヤ否ヤニ付キ熟議ヲ遂ゲタル末左ノ意見ニ決定セリ。

抑モ日本政府ハ已ニ英國裁判所ノ規定ニ依リ一たび上海上等裁判所ニ於テ控訴ニ對スル辯論ヲシタル以上ハ、司法上ニ於ケル救正ノ途ニ依ラザルコトヲ得ザルナリ。若シ今日最終ノ裁判所ニ上訴セザルニ於テハ上海上等裁判所ノ判決ニ服従スルノ形迹ヲ遺スノミナラズ、司法上當然主張スベキ權利ヲ拋擲スルノ嫌アリ。況ンヤ司法上救正ノ手續ヲ盡サズ、中途ニシテ直チニ之ヲ外交談判ニ移シ、國際問題トナスコト能ハザルモノナルニ於テヤ。且ツ清國上海ニ上等裁判所ヲ置キ在日本支那領事裁判所ヨリ控訴ヲ受クルコトニ付テハ、慶應元年及明治十二年英國政府ヨリ受領セシ公文竝ニ明治十二年司法省丁第五號達及條約締結以來領事裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ノ先例ニ依リ本件ハ最終ノ裁判所即チ英國ノ樞密院ニ上訴スルヲ以テ至當ナルモノト判定セリ。

已ニ英國樞密院ニ上訴スルヲ以テ至當ナリト判定シタル以上ハ、第一審及第二審ニ於ケル原告代言人ノ辯論等ニ付仍ホ詳細ナル審査ヲ遂グルノ必要ヲ感ジ、本訴ノ代言人司法省雇カークウツド及岡村輝彦ノ兩氏ヲシテ委員會ニ出席セシメ、本訴ニ關スル手續及辯論等ノ取調ヲナシタルニ、「カークウツド」氏ノ辯明スル所ニ依レバ第一原告ハ表面上日本政府ト稱スルモ其ノ實ハ「カークウツド」氏ヲ起訴シタリ（「カークウツド」氏ガ橫濱裁判所ニ差出シタル宣言書參照）第二、橫濱英國領事裁判所ノ裁判權ハ「カークウツド」氏ノ御委任ニ基キタルモノナルニ依リ「カークウツド」氏ハ該裁判所ニ於テハ英國ノ皇帝ト同ジク君主ノ特權ヲ享有シ法律上責任ナキモノナリ。故ニ原告ハ反訴ヲ受クルノ理由ナキノミラズ又英國商船條例ニアル船主及船長ノ賠償責任ニ關スル制限ノ爲メ檢束セラルベキモノニ非ザル旨ヲ主張シタリ。

第三 若シ英國裁判所ニ於テ日本臣民ニ對スル反訴ヲ許可スルトキニハ是レ條約ニ違反スルモノナリ、而シテ「カークウツド」氏ハ臣民ヨリ不利ノ地位ニ置クコト能ハザルノ故ヲ以テ是レ亦均シク條約違反ナリトノ旨ヲ主張シタリ。

以上ノ説明ニ基キ小官等本件ヲ審議スルニ、

第一、「カークウツド」氏ノ御名義ヲ以テ起訴シタルハ民事訴訟法第十四條及明治二十四年勅令第三號ニ矛盾シタル起訴ノ手續ト言ハザルヲ得ズ。然ルニ此御名義ハ既ニ第一審及第二審ニ於テ使用



セラレタル以上ハ今更ラ之ヲ改メテ日本法令ノ示ス所ニ從ヒ國務大臣ノ名ニ變換スルコトハ到底行ハレザル所ナルベシト雖ドモ、幸ヒニ本訴ハ日本帝國政府ノ名義ヲ以テ提起セラレタルガ故ニ、第三審ニ於テハカメテ□□ノ御名義ヲ避ケ單ニ日本政府ノ名稱ヲ以テ辯論セザルベカラザルナリ。

第二、横濱英國領事裁判所ノ裁判權ハ□□□□ノ御委任ノ範圍内ニ於テ之ヲ施行スルモノナリトノ解釋ニ付キ、小官等日英條約ニ據リ之ヲ調査スルニ、凡ソ英國臣民間ニ起ル訴訟ハ英國官吏ノ裁判權ニ屬スベシ。又英國臣民ガ日本臣民或ハ他國ノ臣民ニ對シ罪ヲ犯スコトアルトキハ英國領事又ハ其他ノ官吏ニ於テ其國法ニ遵ヒ之ヲ審判處罰スベシト規定セラレタリ。是ニ由テ之ヲ觀レバ假令ヒ本邦ノ爲メ可成利益ナル解釋ヲ下サント欲スルモ、領事裁判權ハ□□ノ御委任ニ基キ日本國ノ爲メ英國裁判所ニ於テ之ヲ施行スルモノナリトノ見解ヲ是認スルコト能ハザルヲ如何セン。又該條約ヲ施行スル爲メ英國政府ニ於テ發布シタル樞密院令ヲ觀ルニ英國皇帝陛下裁判所ハ日本在留ノ英國臣民ニ對シ裁判權ヲ施行ス云々ト規定セラレタリ。是ニ由テ之ヲ觀レバ英國政府ハ日英條約ニ依リ英國皇帝陛下ノ裁判權ヲ施行スル爲メニ日本ノ版圖内ニ於テ領事裁判所ヲ設立シタルモノナルコト毫モ疑ヒナキモノナリ。故ニ今日英國樞密院ニ上訴シ、領事裁判權ハ□□□□ノ御委任ニ基キタルモノナリトノ解釋ヲ採リ、

□□ノ特權ヲ主張シ併セテ訴訟ノ進行上主權ノ作用及利益ヲ認諾セシメント欲スルコトハ決シテ望ムベカラザルモノナルガ如シ。

第三、「カークウッド」氏ノ本訴ニ關スル條約違反説ハ其ノ根據甚ダ薄弱ナルノミナラズ、若シ其ノ説ニ對シ法理上嚴正ナル解釋ヲ下ストキニハ、或ハ條約違反トナラザルヤモ亦測知スベカラザルナリ。何トナレバ同氏ノ辯論ニ據レバ□□□□ハ條約以外ニ於テ本訴ヲ起サセラレタリト雖ドモ、若シ日本臣民ニ對シ反訴ヲ提起スルコト條約違反ニ歸スル以上ハ、□□モ亦臣民ヨリ不利ナル位置ニ立セラルベキ理由ナシトノ議論ヲ主張スルモノナレバナリ。然ルニ小官等日英條約及其他ノ條約ヲ審査スルニ、民事ニ關スル條款ニ至ツテハ日本臣民(Japanese Subject)ナル狹義的ノ文字ヲ用ヒズ、常ニ日本人(Japanese)ナル廣義的ノ文字ヲ用キタリ。是ニ由テ之ヲ觀レバ日本政府ト雖モ條約ニ從ヒ當然領事裁判所ニ出訴スルノ權ヲ有スルモノト斷定セザルヲ得ズ。然ラバ則チ上海上等裁判所ニ於テ反訴ヲ許可シタルハ「カークウッド」氏ガ主張スルガ如キ間接ノ條約違反ニ非ズシテ、直接ニ條約ニ違反スル判決ナリト云ハザルヲ得ズ。是レ他ナシ現行條約ノ規定スル所ニ依レバ英國領事裁判所ハ英國臣民ノ被告トナリタル時ニ限り裁判權ヲ有スルモノニシテ、日本人ガ被告トナリタル訴訟受理審判スル權ヲ有セザルナリ。而シテ日本人ガ被告トナリタル場合ニ於テハ日本ノ裁判所之ヲ管轄スベキナ



リ。故ニ反訴ノ名義ヲ以テ本訴ト共ニ英國領事裁判所ニ於テ日本人ヲ以テ被告トシ裁判權ヲ施行スルコトハ直接ニ條約ニ違反シタル判決ト斷定セザルヲ得ザルナリ。

是ニ於テ小官等ハ日本政府ガ英國樞密院ニ上訴スルニ當リテハ左ノ論旨ニ基キ上海上等裁判所ノ判決ノ不當ナル旨ヲ指摘シテ之ガ破毀ヲ求メラレンコトヲ希望ス。

今茲ニ上海上等裁判所ノ判決ノ要點ヲ舉グレバ、

第一、日英條約第六條中公平ニ處斷スルコトアルヲ以テ訴訟規則第五十五條ニ從ヒ反訴ヲ許可スルモ決シテ條約ニ違反スルモノニ非ラザルナリ。

第二、衝突ノ場所ハ各國ノ公開航路ナルヲ以テ之ヲ公海ノ一部ト見做シ海上法ヲ適用シ反訴ヲ許可スルノ權アレバ之ニ隨伴スル保證金ヲ提出セシムルノ權利ハ無論之レアルナリ。

第一、反訴ノ許可ハ條約違反ニアラズト判決シタル理由トシテ、上海上等裁判所判事「ハンネン」氏ハ日英條約第六條ヲ引證シタリト雖トモ、該條ハ同條約締結以來未タ施行セラレタルコトナク、又英國政府ト雖モ該條約第六條ノ規定ニ依ラズ、最惠國條款ノ結果ニ依リ英國人被告トナリタルトキ、英國裁判所ハ從來之ヲ專轄裁判シタリ。又該條約ヲ施行スル爲メ制定シタル千八百五十九年ノ英國樞密院令ヲ熟讀スルニ英國人ニ對シテハ民事ト刑事トノ區別ヲ問ハズ、凡テ英國領事裁判所ノ專轄ニ屬セシメタリ。然ルニ判事「ハンネン」氏ニ於テ該條

約第六條ヲ引用シ反訴ヲ許可シタルハ其當ヲ得ザルモノト云ハザルヲ得ズ。若シ果シテ同氏ノ說ノ如ク該條約第六條ニシテ今日實施セラル、モノナルニ於テハ、英國ノ領事ハ日本官吏補助ヲ求メ共ニ公平ノ處斷ヲ爲サルベカラザルナリ。然レドモ是レ今日英國領事裁判所ノ現況ニ於テ小官等カ見聞セザル所ナリ。

又本問題ニ關スル先例ヲ調査スルニ千八百六十四年米國領事裁判所ニ於テ反訴ヲ許スヤ否ヤニ付キ、米國司法大臣「スピード」ハ日米條約ノ明文ニ依レバ米國領事裁判所ハ日本人ニ對スル反訴ヲ受理スルコト能ハズ、之ヲ受理スルハ條約ノ明文ニ違反スルモノナリトノ意見ヲ同國外務大臣ニ提出シタリ。又在神戸英國領事裁判所ニ於テハ千八百八十九年大島組ヨリ英國人「レイネル」ニ對シ訴訟ヲ起シタルトキ、被告「レイネル」ヨリ反訴ノ許可ヲ請求シタルニ、領事裁判所ハ訴訟規則第五十五條ノ反訴ハ日本人原告ナル場合ニ於テハ許可スベキモノニアラザルナリトノ理由ヲ以テ之ヲ却下シタリ。此ニ由テ之ヲ觀レバ反訴ハ現行條約ノ明文ニ違反シタルノミナラズ、米國司法大臣ノ意見及在神戸英國領事裁判所ノ先例ニ徵スルモ其例證ハ明確ナルモノト云ハザルヲ得ズ。

第二、千島艦衝突ノ場所ハ各國ノ公開航路ナルヲ以テ公海ノ一部ト見做シ海上法ヲ適用シ反訴ヲ許スベキモノナリトノ判決ハ國際公法ノ原則ニ背キ、又本邦ノ法令ヲ蔑視シタルモノナ



リ。抑々國際公法ニ依レバ領海中ニ於テ萬國ノ公開航路ノ存スルガ故ニ、直ニ其ノ國ノ主權ニ屬スル領海ノ區域及權限ニ減縮スルコト能ハザルモノナリ。況ンヤ此内海ハ萬國ノ公開航路ニアラザルニ於テヲヤ。又千島艦衝突ノ場所即チ陸月、興居ノ海峽ハ日本ノ内海中ニ於ケル一ツノ海峽ナリ。而シテ内海ハ四面皆日本ノ領土ヲ以テ圍繞セラレ馬關、紀淡及豊豫ノ三海峽ノ如キモ三海里以内ナルガ故ニ内海ノ全部ト雖トモ、國際公法ノ原則ニ依レバ日本ノ領海タルコト明確ナルモノナリ。況ンヤ其ノ内海中ニアル二海里許ナル陸月、興居ノ海峽ニ於テヲヤ。又三海里ノ標準ヲ以テ領海ノ區域ヲ判定スルハ外海ニ面スル領海ニ適用スベキモノニシテ日本内海ノ如キニ適用スベキモノニ非ザルナリ。又内海ノ我領海タルコトハ古來締盟ノ諸國悉ク之ヲ認定シ、又日本政府ハ凡テノ法令ヲ内海ニ施行シテ其ノ主權ノ下ニ屬セシメタリ。今其ノ例證ヲ擧ゲテ小官等ノ論旨ノ確實ナルコトヲ示サント欲ス。

第一、元治元年幕府ノ閣老ト各國公使ト締結シタル巴里ノ條約及幕府ガ其ノ批准ヲ拒ミタル公文竝ニ之ニ對スル各國公使ノ覺書。

第二、明治三年倭佛戰爭ノ時我外務卿ヨリ發布シタル局外中止ノ布告。

第三、明治元年以來英佛伊三國ノ軍艦ヨリ願出タル内海測量ノ認可。

第四、明治八年太政官布告第百十五號内海ノ海面ヲ以テ官有ト定メタルコト。

第五、明治九年太政官達第七十四號内海ニ於ケル府縣稅ノ賦課。

第六、明治十九年勅令第二十四號内海ヲ海軍區ニ編入セシコト。

第七、内海ノ航路ニ關スル海軍水路部ノ告示。

第八、水先區、漁業區、防禦、軍港、燈臺、浮標礁標等ニ關スル稅法又ハ罰則ヲ定メタルコト。

右ニ記述スル所ニ依レバ千島艦衝突ノ場所ハ日本ノ領海ナルコト萬國公法ニ依リ己ニ明瞭ナルノミナラズ、又舊來ノ外交文書及本邦ノ法令ニ依ルモ爭フベカラザルノ事實ナリトス。

第三、本項ハ第一ニ論述スルガ如ク反訴ノ許可ハ條約ニ違反スルモノナリト主張スル以上ハ之ニ隨伴スル保證金ハ當然提出スルノ義務ナキガ故ニ茲ニ之ヲ詳論スルノ必要ナシ。

以上叙述セシ所ハ小官等ガ委員會ニ於テ審査熟考セシ結果ノ要領ニシテ、之ヲ以テ「カークウツド」氏ガ第一審及第二審ニ於テ論辯シタル趣旨ト比較スルトキニハ、訴訟者ノ名義及條約違反ノ解釋ニ付キ大ナル差異ヲ生ジタレドモ、其上海上等裁判所ノ判決ヲ不當トスルノ爭點ニ至テハ同一ニシテ、今更ニ新事實ヲ提出シテ之ガ論爭ヲ企ツルモノニアラザルナリ。且ツ英國ノ訴訟手續ニ依レバ上訴ニ於ケル爭點ヲ變改セザル限リハ其ノ論辯ノ條項ニ至テハ多少ノ差違ヲ生ズルモ決シテ谷ムル所ニアラザルナリ。然レドモ今茲ニ「カークウツド」氏ニ命ジ小官等ガ決定セシ論旨ニ基キ、英



國樞密院ニ於テ論辯セシメント欲スルコトハ到底望ムベカラザルモノナリ。抑々同氏ノ論辯ノ精神ハ全ク小官等ノ意見ト異リタルガ爲メ、假令ヒ表面ニハ此ノ報告ノ旨趣ヲ守ルベシト約束シテ英國ニ渡航スルモ、樞密院ノ訟廷ニ於テハ不知不識前説ノ軌轍ニ準行シテ辯論スルニ至リ、此ノ報告ノ旨趣ヲ貫徹スルコト能ハザルベシ。故ニ此ノ際更ニ日本人中ヨリ適當ナル人物ヲ選抜シテ本件ノ主任者ヲ命ジ、英國ニ渡航シテ樞密院ノ訴訟手續ニ熟練ナル英國代言人一名及國際公法ニ明カナル公法家一名ヲ雇入レ本件ヲ擔當セシムルコト必要ナリト思考ス。而シテ其上訴ノ辯論ニハ訴訟狀ノ表面ニ記載シタル日本帝國政府ノ名義ノ外決シテ□□ノ御名義ヲ唱道スルコトヲ禁止スルノ命令ヲ下サレンコトヲ希望ス。

終リニ臨ンデ一言ノ附記セザルヲ得ザルモノアリ。

曰ク、若シ本訴ニシテ英國樞密院ニ於テ日本政府ノ敗訴トナリタルトキハ最早司法上ノ救正ノ手續ヲ了リタルモノナレバ、訴訟事件ヲ轉ジテ外交問題トナスノ外他ニ途ナキナリ。事茲ニ至ラバ直ニ本訴ヲ撤回シ又反訴ノ進行ニ服從セザルノ決心ヲ示シ、若シ英國政府トノ談判妥結ニ至ラザルトキ時宜ニ依リ局外國ノ仲裁判決ニ委托シ本件ヲ處理スルノ決心アランコト切望ノ至リニ堪ヘザルナリ。

## 衆議院ニ於テ千島艦事件ニ付演説

### 附 衆議院議員第二質問ニ對スル答辯案

本大臣ハ兼テ千島艦事件ニ付議院ノ内外ニ於テ世論囂々トシテ政府ノ處置ヲ非難スルヲ見テ深ク憂慮ヲ懷キ、機會ヲ得テ諸君ニ對シ答辯ヲ試ミント企テ居タリシニ、幸ニ今日ハ議場出席ノ際ニ議員ヨリ上奏案ノ提出セラルルニ當リタレバ、本大臣ハ茲ニ所見ヲ吐露シテ諸君ノ前ニ訴フルノ止ムベカラザルニ迫レリ。

此ノ事件ハ皮相ノ觀察ニ依リ痛ク世人ノ感情ヲ害シタルノ有様アリ。諸君ハ此ノ感情ヲ取テ直ニ政事上ノ問題ト爲シ、恐レ多クモ上九重ヲ煩ハシ奉ラント迄ニ企テラレタル際ニ當リ、諸君ハ既ニ胸ニ成竹アリ、理ノ當否ハ必シモ問フ所ニ非ルベケレバ、本大臣ガ如何ニ此ノ激浪逆シマニ捲クノ矢先ニ進ミテ法理上ノ辯解ヲ試ミルトモ、其結果ノ萬一ヲ諸君ニ望ムベカラザルハ飽ク迄知ル所ナリ。

去リナガラ是公事ナリ私事ニ非ズ、國家重大ノ問題ナリ、殊ニ外國關係ノ問題ナリ、各國ノ人モ此ノ一事ニ依テ日本國民ガ果シテ法理上ノ智識アリヤ否ヤヲトフノ證例ト爲スモノアルベク、百年



後ノ歴史ハ此ノ一事ニ依テ以テ明治年間ノ國民ガ如何ニ文明ノ思想ヲ有セシヤノ分量ヲ論ズル者アルベシ。斯ノ如キ重大ノ問題ナルニ依リ、政府ハ固ヨリ枉ゲテ世論ニアルコト能ハズ、本大臣ハ又一世ヲ擧ゲテ激烈ナル攻撃ヲ本大臣ノ一身ニ集ムルトモ、決シテ分毫モ所見ヲ枉グルコト能ハズ、唯ダ恃ム所ハ諸君モ亦愛國ノ衷情ヲ同クスルノ人ナルコトヲ知ルガ故ニ、今日ニ當リ唯赤誠ヲ吐露シテ以テ諸君ノ良心ニ訴フルノ一途アルノミ。

上奏案ノ言フ所ニ依レバ、千島艦事件ハ條約上特約ナキモノニ係ルニ依リ、帝國ノ主權ニ存スト云ヘリ。此ノ意味ヲ分析スレバ英國領事廳ニ出訴シタルヲ國權ノ屈辱トシ、其出訴スルコトノ代リニ帝國ノ主權ニ依リ、我レ自ラ處分スベシ、即英國彼阿會社ノ商船ヲ直チニ取押ヘテ、我が裁判所ノ權力ニ依リ之ヲ公賣ニ付シ、以テ千島艦ノ損害ヲ償ハシムルコト至當ナリト云フモノナリ。此ノ一言ハ諸君ハ果シテ我が日本帝國ニ對シ責任ヲ有セラルルノ言論ナリヤ、若シ萬一ニモ諸君ノ上奏案ニシテ雲ノ上ニ進達セラレ、辱クモ御採用アラセラレナバ如何、諸君ハ果シテ此ノ言論ヲ實行サルルヤ、又此ノ言論ハ現行條約ノ存スル限り實行シ得ラルルモノト信ゼラルルヤ、此ノ說ニシテ實行セラレナバ一國ヲ誤ルモノハ必ズ此ノ說ナラン。本大臣ハ諸君ノ激怒ヲ犯シテ以テ此ノ一言ヲ吐露スルコトニ躊躇セザルナリ。

諸君ハ原告ガ政府ナルガ爲メニ、被告ガ外國人ナルコトヲ忘レラレタルカ、現行各國條約ハ明ニ

被告ガ外國人ナルトキハ外國裁判官之ヲ裁斷スベシトノ明文ヲ掲ゲタリ。之ヲ名ケテ治外法權ノ條約ト云フ。此ノ條約ノ改正セラレザル限リハ、此ノ明文ハ履行セラレザルベカラズ。此ノ條約アルニ拘ハラズ、日本裁判所ニ於テ外國ノ會社ノ船舶ヲ押ヘ之ヲ裁判シ之ヲ公賣ニ付セバ、忽ニ起ルベキ國際問題ハ如何ナル結果ヲ呈スベキヤ、諸君ハ條約ノ明文ニ違反シテモ猶各國ト平和ノ交際ヲ保ツベシト云フカ、諸君ハ斯ノ如キ條約ノ範圍外ニ超出シタル舉動ヲ以テ猶ホ宣戰ノ名義ト爲スベシト云フカ、惟フニ諸君ハ政府ノ外國裁判所ニ召喚セラルベカラズトノ消極的ノ論理ヲ誤リ、倒ニ政府ハ外國ノ裁判所ニ出訴スベカラズトノ謬說ニマデ適用セラレシニ非ルカ（此ノ誤ハ條約勵行建議案ニモ同様ニ見エタリ）

一國ノ政府ガ他ノ一國ノ人民ニ對シ其ノ國ノ裁判所ニ出訴スルコトアルハ國際上常ニ見ル所ニシテ、其理由ハ畢竟國ノ權利ヲ伸張セントスルノ方法ヲ取ルニ外ナラズ、政府ト政府トノ争ハ之ヲ國際問題トス。甲ノ國ノ政府ガ乙ノ國ノ人民ニ對スル訴訟ハ之ヲ司法問題トス。此ノ事ハ國際上普通ノ事ナリ稀有ノ事ニアラズ。但何レノ國ノ條約ト雖ドモ君主又ハ政府ガ訴訟ヲ起ス場合ヲ規定シタルノ正條ハ無シ。明文ハ無シ。何トナレバ此事國際私法ノ慣例ニ從フ者ニシテ、政府ノ爲メニ特別ノ訴訟ノ個條ヲ條約ニ明記スルノ必要ナケレバナリ。此ノ條約上ノ明文ナキガ爲メニ、政府ハ外國ノ人民ヲ出訴スルノ權利ナシト云フカ、是レ自ラ其ノ權利ヲ伸張スルノ方法ヲ拋棄スルモノナリ。



今茲ニ一步ヲ譲リ、好シ諸君ト共ニ現行條約ヲ抹殺シ、條約明文ノ外ニ於テ治外法權ノ條約ナキ普通ノ國際法ニ依リ觀察ヲ下サンカ、是亦諸君ノ言ヘル如キ一種痛快ナル處分ヲ爲スヲ許サ、ルナリ。何トナレバ一ノ法人タル會社ヲ訴ヘ、又ハ財産ヲ差押ヘントセバ其會社ノ所在地ニ依リ裁判籍トスルハ我が民事訴訟法第十四條ニモ見エタルノミナラズ、或ル特別ノ場合ヲ除ク外、國際私法ニ於テモ亦各國ニ行ハルル通義ナリ。千島艦事件ノ如キ縱令治外法權ノ條約ナシトスルモ、彼阿會社ニ對シ損害ノ賠償ヲ求メントセバ、被告タル會社ヲ喚出スノ權力アル所ノ英國裁判所ニ向キ訴訟スルノ外他ニ權利ヲ伸張スルノ道ナキナリ。

惟フニ諸君モ亦必ズ國際私法ニ於テモ現行條約ニ於テモ二ツナガラ不可ナル所ノ主權論裁判管轄論ヲ眞面目ニ主張セラルルニハ非ズシテ、唯諸君ノ本意ハ政府ガ何故ニ權利ヲ拋棄セズシテ、進ンデ英國裁判所ニ起訴シタルカト云フニアルナルベシ。併ナガラ一國ノ政府ハ及ブダケ有ラユル方法ニ依リ以テ國ノ權利ヲ伸張スルノ道ヲ圖ラザルベカラズ。即チ國ノ受ケタル損害ヲ満足スルノ途ヲ取ラザルベカラズ。千島艦ハ端ナク覆没シタリ、此ノ覆没ノ原因ハ外國商船ノ過失ニ在リト認メタラバ、適當ナル方法ニ依テ其ノ商船ノ本屬會社ヲ訴フルハ固ヨリ賠償金額ノ關係ニ非ズシテ我が海軍ノ名譽ヲ保全セントスルモノナリ。然ルニ諸君ハ權利ヲ伸張スルノ方法ニ反對シテ却テ權利ヲ拋棄スルノ道ヲ取ラントス。是即チ諸君ノ平生ニ忌惡スル所ノ退縮主義ニ陥ルノ嫌ナキヤ。

裁判管轄論ノ誤ハ諸君ノ過半ハ素ヨリ既ニ明瞭ニ了解セララルナラン。唯諸君ノ最深ク疑ヲ存セラ  
ルルモノハ

□□□□ノ御名ヲ用キルト云フノ一事ニ在ルガ如シ。此ノ事コソ本大臣ガ一身ヲ睹シテ十分ナル辯  
解ヲ與ヘ以テ諸君ノ惑ヲ釋カント欲スル所ナリ。

第一、訴訟トハ何デアルカ、權利ノ訴デアル。此ノ訴件ハ千島號ノ訴ナリ。千島號ノ訴ニハ千島  
號ノ權利ヲ主張セザルベカラズ。千島號ハ何故ニ權利ヲ有スル、千島號ハ日本帝國ノ軍艦ナリ。即  
チ憲法第十一條ニ依リ日本 □□□□ノ統率シ玉ヘル軍艦ナリ。サレバコソ千島號ハ普通ノ商船ト  
異ナル所ノ特別ノ權利ヲ有スル。此ノ權利ノ基ク所ヲ説明スル爲ニハ憲法第十一條ノ示ス所ニ依  
リ、主權者ノ所屬タルコトヲ主張セルコトヲ得ズ。何人モ千島號ハ海軍大臣ノ軍艦ナリト説明スル  
ノ人アラザルベシ。

此ノ明白ナル道理ハ素ヨリ諸君ノ疑ヲ惹起スベクモアラズ、惟フニ諸君ハ唯直接ニ □□□□ヲ  
以テ訴訟當事者ト爲シタルガ如ク誤解セラレシナルベシ。或ハ又甚シキハ □□□□ノ大御名ヲサ  
ヘ書顯セシカノ如キ誤聞モアラン、斯ノ如キハ決シテ政府ノ爲サバリシ所ナリ。政府ハ諸君ノ第一  
ノ質問ニ答ヘタル如ク、訴狀ニハ單ニ帝國政府ノ名ヲ用キタリ。而シテ橫濱領事裁判所モ亦被告タ  
ル彼阿會社ノ故障アリシニ拘ハラズ、我が帝國政府ノ名義ヲ以テ訴訟當事者ト認メタリ。併シナガ



ラ諸君ノ第二ニ提出セラレタル質問ニ依レバ、政府ノ訴訟代理者ガ □□ノ名義ヲ用キ、千島艦ノ權利ヲ主張シタルコト、及び彼ノ裁判所ガ裁判ノ理由トシテ □□ノ名義ヲ引證シタルヲ政府ガ看過シタリトテ之ヲ非難セラルルモノノ如シ。然ルニ我が政府ハ始終帝國政府ノ名ヲ用キ、訴訟當事者ノ位置ヲ取レリ而シテ訴訟代理者ガ千島艦ノ我が □□□□ニ屬スル軍艦ナルガ故ニ、其ノ無責任ナルベキコトヲ主張シタルハ、畢竟權利ヲ主張スル爲ニ論理上ノ推源法ニ依レルモノナルトキハ、是亦深く咎ムベキニ非ズ。

第二ニ英國領事裁判所ニ於テ □□ノ名義ニ依リ、反訴ヲ拒ムノ理由トナシタルハ我が政府ノ權カヲ以テ之ヲ左右セシメ得ベキ所ニ非ズ。此ノ事ニ付キ特ニ諸君ノ注意ヲ要スルコトアリ。英國裁判所ノ慣例ニ於テハ外國ノ訴訟ヲ受クルニ當リ、其訴訟者ノ共和國ナレバ其政府ノ名ヲ用キ、君主國ナレバ其君主ノ名義ヲ用キルヲ通例トス。何トナレバ英國ニ於テハ君主國ハ其君主一人ノ統轄ニ屬ストノ主義ヲ以テ自國ノ法理上ノ原則トスレバナリ。此ノ英國ノ慣例ハ外國ヨリ英國裁判所ニ向テ起訴スル所ノ訴件ニ於テ屢々行ハルル所ニシテ、各君主國ニ於テモ嘗異義ヲ容レタルコトナシ。即チ西班牙皇帝對ハーレツトノ件、巴里西皇帝對ロビンソンノ件、奧地利皇帝對デーノ件等ナリ。然ルニ我が政府ノ千島艦ノ件ニ於テ我が國法ノ精神ヲ存スル爲メ、特ニ各國ノ例ニ據ラズシテ帝國政府ノ名稱ヲ用キ訴訟當事者トシ、英國裁判所モ亦之ニ依テ受理シタリ。併ナガラ我が政府ハ訴訟

當事者ノ位置ニ在リ、而シテ此ノ訴訟ヲ受理スルモノハ英國裁判所ナリ。訴訟者ハ我が國法ヲ以テ訴訟ヲ受クル法廷ヲ檢束スルコト能ハザルハ是亦國際私法ノ通義ナリ。諸君ハ我が國法ノ精神ヲ極點マデ固執シ、以テ外國裁判所ヲ檢束セザルコトヲ非難セラルルモノノ如シト雖モ、我ニ於テ訴訟ノ權利ヲ拋棄セザル限ハ、此ノ事通義ノ許サル所ナリ。

今日ハ一國ヲ提ゲテ列國交際ノ間ニ立テリ。公法ナリ私法ナリ國際法ニ依ラズシテ一步モ進行スルコト能ハザルベシ。今一例ヲ舉ゲンニ、我が國ト他ノ君主國ト國際上ノ爭議アルニ當テ、第三ノ一國ニ仲裁ヲ委託スルコトアランカ、兩國共ニ主權者ノ名義ヲ用キテ訴訟當事者トスルハ當然ノ事ナリ。是國際公法ト國際私法トノ別アリト雖モ、主權者ハ訴訟當事者タラズト斷定スルモノアラバ、是國際上ノ通義ニ達セザルノ論ト謂ハザルコトヲ得ズ。

併シナガラ國際上ノ道義如何ニ拘ハラズ、直接ニ君主ノ名義ヲ用ウルヲ憚ル爲メニ、我が政府ハ此ノ訴訟ノ初メニ於テモ亦將來ニ進行スベキ訴訟ノ結局ニ於テモ徹頭徹尾帝國政府ノ名義ヲ以テ訴訟當事者トスルコトヲ決心セリ。此ノ事ニ付テハ諸君モ御安心アランコトヲ望ム。

元來諸君ハ此ノ事ヲ以テ國體上ノ屈辱ト思惟セラレタルガ如シ。果シテ國體上ノ屈辱ニ涉ルモノトセンカ、是國家ノ問題ナリ、黨派ノ問題ニ非ズ。本大臣モ亦不肖ナリト雖ドモ自ら良心ニ訴ヘテ枉ゲテ政府ノ爲メニ辯護スルコトノ愚ヲ學バザルベシ。若又萬一ニモ此ノ事一時感情ノ刺戟ニ過ギ



ズシテ、退テ國際上ノ通義ヲ以テ參照スルトキハ、諸君ノ唱ヘラル、如キ失體ノ件ニ非ズトセンカ、本大臣ハ諸君ニ向テ又諸君ノ良心ニ訴ヘ、多數ノ勢力ニ依テ世論ヲ動搖スルノミナラズ。恐多クモ 上九重ヲ煩ハシ奉リ、屢々宸襟ヲ腦シ奉ルノ誤タルコトニ於テ殊ニ反省ヲ求メザルコトヲ得ズ。

以上本大臣ノ陳述スル所ハ此ノ問題中ノ最大要點ニシテ、之ヲ過ギテ以往訴訟上ノ關係ノ如キハ世間法學士ノ講究ニ讓リ茲ニ多辯ヲ要セザルベシ。

本大臣ハ茲ニ終局ノ一言ヲ加ヘントス。諸君ハ斯ノ如キ重大問題ニ對シ如何ニ熱心ニ主張セララルニ拘ラズ、政府ノ異議ヲ容ル、ニ當リ兎ニ角ニ十分ナル調査ヲ遂ゲラルルコト諸君ノ義務ナリト信ズ。故ニ本大臣ハ諸君ガ大早計ニ上奏ノ方法ヲ取ラルルコトナク一應撤回セラレ更ニ法理上ノ調査ヲ遂ゲラレンコトヲ望ム。

衆議院ヨリ軍艦千島ニ關スル第二ノ質問ニ對スル御答辯案相添御照會之趣承知致候、右ハ簡單ニ先例ニヨリ上海上等裁判所ニ出廷シ答辯シタリトノ趣旨ヲ以テ御答辯相成候方都合宜敷ト存候。右回答申進候也

明治廿六年十二月二日

外務大臣 陸 奧 宗 光

海軍大臣 伯 爵 西 郷 從 道 殿

一、軍艦千島衝突損害要償事件ノ訴狀ニ掲ゲタル原告ノ名稱ハ帝國日本政府ノ名稱ヲ用キタルモノナリ。

二、日英條約ノ條款施行ノ爲メ上海ニ高等裁判所ヲ置キタルコトハ英國政府ヨリ慶應元年ニ通知アリ日本政府ハ之ヲ認メ來レリ。

(一)ハ朱書

(明治十二年ニモ亦英國公使ヨリ通知アリ司法省ヨリ各裁判所ニ心得ノ爲達シタリ)

告 例

千八百七十八年横濱ニ於テ公道及家屋建築ニ付土地取戻ノ件ヲ日本政府ノ名義ヲ以テミツチエル及ヒコープニ對シ起訴シタリ右代言人ハカークウツド氏ナリ右ハ横濱英裁判所ニ於テ敗訴シ在支那高等裁判所ニ控訴ヲ爲シ勝訴トナリタル例アリ。



# 井上毅等書狀一套

内 申

千島號事件ニ付昨日一應申上候愚見猶略啓仕候。

一、此事ハ司法問題ナリ故ニ國際問題トシテ我ヨリ提起スルモ其效ナカルベシ。縱令英國樞密院ニ前告シタル後ニ國際問題ヲ提起ストモ彼ノ政ハ

「英國政府ハ司法問題ノ判決ヲ左右スルノ權ナシ」トノ簡短ナル一言ヲ以テ答覆スルニ過ギザルベシ。

二、去トテ此事ヲ默過センカ、司法問題ノ判決例ハ間接ニ國際問題ノ我レニ不利ナル結果ヲ生ズベシ。即チ國權ノ消長ニ關スベシ。

故ニ我レハ今ニ至テ困難ノ位地ニ立テリ。

三、此ノ困難ノ位地ヲ三轉スルニハ唯ダ左ノ一方法アルノミ。曰

「當期議會ニ於テ帝國領海ノ法律ヲ定メ中外ノ疑議ヲ將來ニ截斷ス。」

上海控訴法廷ノ補助判事ガ謂ヘル如ク「三哩以内ヲ領海トス」トノ公法家ノ定説ハ更ニ其ノ

國。法。ニ。何。等。ノ。正。條。アルニ非ザレバ、未ダ以テ裁判上ノ證據トスルニ足ラズト謂ヒ、而シテ英國樞密院ノ判決例ハ實ニ且ハ陸地ヨリ三哩ノ海ニシテ、且ハ外海ヲ受ケタル場所ニ起リタル事件ヲバ英國領海ノ外トシテ裁判シタリ。故ニ我レハ單ニ國際法學說ヲ證據トシテ英國樞密院ニ上告スル事ノ七分不利ナルコトヲ認メザルベカラズ。而シテ却テ將來ニ永遠ノ國權ヲ維持スル爲メニ之ヲ立法問題ニ移轉スルヲ以テ上策トスベシ。

若司法問題ヨリ之ヲ國際問題ニ轉ゼントセバ、我ヨリ彼レニ對シ他動的ノ位地ニ立タザルベカラズ（即チ改位）此レ我レノ不利ナリ、又我レハ立法問題ヲ以テ此ノ關點ヲ補ヒ而シテ彼レニ不服アルトキハ（間接ニ控訴判決ヲ破毀ス。故ニ彼レ或ハ不服アラン）彼レヨリ國際問題ヲ提起セザルベカラズ。即チ我レハ自動的ノ位地ニ立ツモノニシテ（即チ守位）我レノ利ナリ。

此ノ種ノ立法事業ノ固ヨリ容易ノ事ニ非ザレドモ、今日ヨリ委員ヲ組ミ講究シタランニハ猶議會ノ劈頭ニ提出スルニ難カラザルベシ。別紙ハ考案ヲ喚起スルノ參照トシテ供覽、又佛國ニテハ漁業法ニテ定メタル一條アリ併テ供覽、右ハ國權問題ニシテ他ノ訴訟問題ヲ樞密院マデ上告スベキヤ否ヤハ前件ニ關係ナシト雖、左ノ事狀熟考ヲ要スベキガ如シ。

一樞密院ハ憲法上英國王爲政ノ府ナリ樞密院ノ判決ハ即チ英王ノ判決ナリ。英國ノ裁判慣例



ハ政府ト謂ヘル名稱又ハ獨逸ノ如ク財産ト謂ヘル名稱ヲ取ラズシテ必某王ヲ以テ訴訟ノ當事者ト爲ス。  
故ニ我が□□□□ハ原告(上告原告)トシテ英國女王ノ裁判ヲ受ク(シカモ英國人民ニ對シ)トノ名義ヲ免レズ。

「此事今朝ノ自由新聞社説參照」

若シ能フベクンバ此事ハ避クベキ事ナリ、但シ上告必勝ノ成算アラバ格別ナリ。

(明治三年ノ中立布告ノミニテハ不十分ナリ)

要スルニ千島號事件ヲバ一ノ民事ニ止メテ他ニ最高方略ヲ取り間接ニ英國控訴判決ヲ破毀スルヲ得策トス。

右ハ匆率間々衾見ニテ更ニ十分思考之上可申上筈ニ候ヘドモ事緩慢ヲ容レザルニ由リ、先奉略啓候御他見下被致様相願候。

十一月九日午後十時半

毅

首相閣下

後日此書面ハ返却奉願居リ候

奉拜啓候本日ハ參集被命定テ千島艦一件之御評議ニモ可有之歟ニ及候ヘバ、是非陪趨可仕筈ノ處、一昨夕來風邪ノ氣味ニテ引籠居候ヘバ不得已不參仕候。

別冊ハ大學雇ノ獨逸法學者レーンホルム氏ノ意見書ニ有之、同氏今度ノ事ニ付意見ヲ抱キ、世ニ公ニスベキ等申居候由聞及候ニ付、兎ニ角生迄内示候様人ヲ以テ申聞候末、今日サシ出シ佛前ノ說法ニ有之候ヘドモ萬一ノ御參考迄ニ奉供覽候。此事司法上條約上公法上種々ノ問題非常ニ錯雜敷居候歟ニ相見候ヘバ、内外専門家ヲ御集相來リ司法大臣手元ニテ一週間ヲ期シ十分御取シラベ相成、其報告結果ニ依リ御處分相成候テハ如何到底小生等匆率之意見申上候モ無益之事ト存候。

頓首

十一月十三日

井上毅

伊藤首相閣下

拜啓屢煩清聽恐縮之至ニ御座候ヘ共憂慮之餘リ不顧失敬以書中愚見奉供御參考候。

千島艦訴訟事件朝野ニ一大難關ト相成、英京ニ於ケル上告問題之結果如何ニ依リテハ内治外交俱ニ非常ノ難件トモ可相成、而シテ其關係ノ件ニハ第一國家ノ主權、第二帝國ノ海軍權力、第三司法上

井上毅・金子堅太郎等書狀一套



ノ權限、第四外交ノ紛糾等ニ有之、元勳内閣ノ勢力及威信ニモ影響ヲ及ボシ、政府攻撃者ノ口實材料トナリ、實ニ不容易形況ニモ可相成候間、此際本件ニ關スル調査之爲ニ

内閣

外務省

海軍省

司法省

ニ於テ主査ヲ設ケ、十分上告之手續順序答辯ノ方法其他裁判上ニ關スル一切ノ事件ヲ研究確定スル事目下ノ急務ト奉存候。

右裁判上ノ調査ト共ニ將來ニ於ケル外交上ノ談判及政府ノ採ルベキ外交策ノ方針等ヲモ此際併セテ研究確定スル事緊要ト奉存候。故ニ政府ハ今日裁判上ニ於ケル方策ト將來ノ外交談判ノ方法トヲ對比、併列シテ一定ノ進路ヲ御決定アラン事ヲ希望仕候。然ラバ即チ假令ヒ上告ニ於テ破訴トナルモ、後日外交ノ談判トスルトキニ當リ遺憾ノ事ナキハ勿論、十分研究問題及材料ヲ蒐集スルコトヲ得ント愚考仕候。

上告スルニ付テハ左ノ件々御注意アラセラレシコトヲ奉希望候。

第一、上告ニ於ケル答辯ハ成ルベク後日外交談判ヲ開ク時ノ便利ニナルコトノミヲ主唱シ答辯

ノ爲ニ後日ノ不利トナルガ如キコトハ勉メテ避クル事。

第二、上告代言人ハ日本人ヲ主任トシ英京ニ於ケル第一流ノ公法家ヲ顧問トシ「カークウッド」ノ補助トスル事。

理由

英人ハ國家觀念ニ強キ人種ナルガ故ニ今回ノ如キ國家問題ヲ外人ニ放任スルハ尤モ輕侮嘲笑スル所ナリ、故ニ日本人ヲシテ此問題ノ處置ヲ主張セシムルハ樞密院ノ裁判官ヲ動スノ第一ノ手段ト愚考仕候。

領海ニ關スル材料ハ目下反譯中ニ付其脱稿次第可奉供尊覽候。毎々不憚尊嚴愚見開申仕候如ハ御海容奉祈候。

金子堅太郎

伊藤首相閣下



秘書類纂 千島艦事件 終

秘書類纂 千島艦事件

人名索引

(イ)

伊藤 博文 八三、二二三、二四三、二四五  
イー・エチ・ポラード 一八  
井上 毅 二二三、二四〇、二四一、二四三  
伊藤 藤 二二三

(ロ)

ロバートライド 一八一  
ロビンソン 三三

(ハ)

バチエロル 完  
ハーリーエスパーワス 三三、四〇  
ハブルニチユリー 完

人名索引

ハルトマン 八五  
ハールテスタ 八六、二九  
ハルシエル 九五  
ハンネン 一八一  
バークレー 二六、三六  
ハークレー 二八、三九  
ハーレット 三三

(ホ)

ホイートン 三〇、四  
ホーレル 三三、四  
ホイートレー 完  
ホルランド 九六、一〇  
ホートフウイユ 二二、二三  
ホツプハウス 一八一

(ヘ)

ヘンリーサットン 一八一

(ト)

ドマルタン 三三  
トーマスバルクレー 八三、八五、九七、一〇九、二四



《リ》

リツケツト 四、五  
リオンカン 八五  
リケルム 八八  
リチャードウエブスター 一八  
リチャードカウチ 一八  
リグビー 二〇、二一

《ル》

ルノール 八五、八六

《オ》

オルトラン 二三  
オルターヒルリモール 一八一  
岡村輝彦 二〇九、二二、三五、二七、二九、三三  
岡村義昌 二四

《ワ》

鷺尾松三郎 二九  
和田要藏 二九  
ワットソン 一八一

《レ》

レノールト 三三  
レツスカツス 三九  
レイネル 二七  
レーンホルム 二四

《ラ》

ラツシユ 四五  
ラウダー 二〇  
ラツセル 二二、二三、二六

《ム》

武藤百智 三〇、三九  
陸奥宗光 三九

《ウ》

ウエストレーキ 三三、四四、八八  
ウイスバダム 八四  
ウールセー 九五  
ウオルタージーエフキリモル 一六  
ウエブストル 二二、二六、二七

ワルフオールド 一九

《カ》

カーラード 五  
カルウオー 二三  
金子堅太郎 四九、二八、二四〇、二四  
加藤高明 一九、一九九  
河瀬 二二  
カーズン 一九  
カークウッド 二〇、二七、二八、三三、三五、三九、  
二五、二四五

《ヨ》

吉田平之助 二九  
吉田直温 一九五

《タ》

田中久次郎 二九  
ダヴリユーデニング 二九  
田中平三郎 二九  
ダンダス 二、七、四  
ダヴェー 一八一

《ク》

クウインスカウユシルフランシス 一  
クラオンアドヴオケート 一  
楠本正隆 二九、三九  
クレオファスルシニー 三〇  
克蘭クロックード 八一

《マ》

マールモンド 三七  
松岡康毅 一四  
松波仁一郎 一七九、二〇六  
マクネーテン 一八二

《フ》

フレット 二三  
ブリツジエツトプロツクレー 二九、三九  
フレシネー 三  
フェローヂロー 八五、九五  
ブルニチュウー 九五  
ブルーンチリー 一七

《コ》



コックホルユ 一三  
ゴルドスミドト 一四三  
コートレー 三二

(エ)

エンジエーハンネン 一、二、三、六、七、六、九、  
四、四、四、四、四、四、四、四、四、四、  
六、六、六、六、七、七、七、七、七、七、  
二七、一五三  
エツチエスウキルキンソン 一  
エムカークウツド 一、五、四九  
エツチビーウキルキンソン 一  
エドマンドホンビー 一八、三三、一九四  
海老塚四郎兵衛 三九  
エフドスルタン 八六  
エルワリー 九六、九六、一〇六、一〇九  
エルエムベイオーベルト 九六、一〇七、一〇八  
エチエスコートリー 一七六、一八一  
エフエーサトー 一七六、一八一

(テ)

寺尾 享 三六

(シ)

ジヨ、ジャミーソン 一、九、三、三、三、三、四、四、四、  
四、四、四、四、四、四、五、五、五、五、  
七、七、七、七、一七、一五三  
ジエーエフラウダー 一、二六、二七、一五五、一八〇  
清水市太郎 二四、二五、二六、二七、二八  
清水異之助 三〇  
シールシニー 三九  
ジエーダヴルユーマツカジ 一八一  
シヤンド 一八一

(ヒ)

ヒエービーストック 一  
ピンカーシヨツク 三、三、六、八、一〇〇、一一〇  
ビコープ 七、三九  
ピゴツト 八、二五、二七  
ビエルメリンク 八四  
ピンチスホイワ 一一  
ビウエアトン 一一  
ピユトワイ 一一  
ビジュウエルジ 一一

デーノ 三三六

(ア)

アルマールモン 四三  
アツセル 八六  
アスシユーフ 一〇七  
亞歴山 一三、一三  
アンダーソンモワツト 六、六、七、七、七、七、  
二九、三三、一五三、一六六  
アーサーコーヘン 一七六、一八、二〇、二二、二五、三五、  
二六  
アトキンス 二二〇  
青木周藏 二二、三四、二七、二八  
(サ)  
サリスベリー 一九九  
西郷従道 二〇六、二〇八、二二九  
サトウ 二二、二五、二六

(ミ)

ミツチエル 七三、三九  
ミシエルルヴオン 一三〇、一四三

ヒンレー 一八一

(モ)

モアニエー 一〇九  
モーリス 一八一

(セ)

ゼーリケツト 一九九

(ス)

スコツト 六  
スピード 四、四、三七



昭和十一年六月八日 印刷  
昭和十一年六月十三日 發行

(非賣品)



參・纂 雜

製 複 許 不

校訂者  
發行者  
印刷者

平塚

篤

東京市杉並區西荻窪二丁目六十六番地

平塚

篤

東京市本所區厩橋一丁目廿七番地  
凸版印刷株式會社本所分工場

河合勝夫

東京市麴町區內幸町大阪ビル内

發行所

秘書類纂刊行會

電話銀座(57)五五八九番  
振替東京三一六六四番



3059







